

私の「真宗学」	1
2012(平成24)年度「指定研究」等研究組織一覧	2
2012(平成24)年度「指定研究」等研究目的紹介	4
2012(平成24)年度「一般研究」研究組織一覧	8
2012(平成24)年度「一般研究」研究目的紹介	10
海外学会参加報告	21
海外研究調査報告	23
国内学会参加報告	24
国内研究調査報告	26
研究成果報告	29
Cultivating Spirituality出版について	32
研究成果報告会	33
特別研究員研究成果報告	35
彙報	40

私の「真宗学」

学監・副学長 教授 水島 見一

本年度より設定された副学長という職に就くにあたり、大谷大学真宗総合研究所が目指すべき方向性について、一言申し述べたい。

本研究所は、その名が示す通り、「真宗」及び「真宗学」を基礎に置いている。親鸞思想の研究に携わる一人として、私は阿部謹也氏の学問姿勢に導かれる。阿部謹也氏は、自書『自分のなかに歴史をよむ』（筑摩書房）の中で、恩師である上原専禄が三木清のさまざまな著書を読んでまとめられた論文の報告を受けた際に、その学生に向かって語った言葉を自らの学問の原点として、「今でもおりにふれてこのことを思い出します」と述べている。その言葉とは、次のようなものであった。

あなたの報告を聞いているとまったくそのとおりだと普通なら思うでしょう。つまり三木清の著作だけをよんでいけばそうならざるをえないでしょう。でも私にはそれはまったく違うと思うられるのです。なぜなら私は三木清を知っているから、あなたの報告はまったく違うと思ってしまうのです。この問題をどう考えるかですね。書物を通して三木清の人間に迫らなければならないということになるのでしょうか。（傍点は水島）

真宗学が親鸞や清沢満之、また曾我量深の著作を精読することによって成立する学問であるが故に、上原専禄が三木清の著作を読んでまとめた論文内容は間違いなしとしながらも、それが三木清とは「まったく違う」と指摘し、そしてそのような「問題をどう考えるか」との提言をするが、私はその提言に頷かざるを得ない。阿部謹也氏によれば、上原専禄は学問する主体が研究対象である三木清に迫るような学問、それが私であれば、親鸞や清沢満之が学問主体である私の思想形成を促すような学問であると言えよう。

阿部謹也氏はさらに、上原専禄の言葉をもって、自らの学問姿勢を確かめる。

- ・どんな問題をやるにせよ、それをやらなければ生きてゆけないというテーマを探すのですね。
- ・解るということはそれによって自分が変わるということでしょう。

そして、これらの言葉に導かれて次のように述べている。

私には歴史学のあり方を客観的に叙述し、描写することはできないのです。私にとって歴史学はこのようなものでしたと語る以外の方法はないの

です。なぜなら、私にとって歴史は自分の内面に対応する何かなのであって、自分の内奥と呼びたくない歴史を私は理解することはできないからです。

阿部謹也氏は、著作を読み「客観的に叙述」することがそこに止まらずに、「自分の内奥と呼び」すること、つまり私の思想となるような学問を主張しているのであろう。阿部謹也氏の『自分のなかに歴史をよむ』とは、学問主体の根源的実存的要求に応答する学問のあり方を言い表すものであり、それは、親鸞の思想研究を中核とする真宗学の基盤をなすものではないだろうか。

親鸞は『教行信証』製作の意図を「総序」に、

真宗の教行証を敬信して特に如来の恩徳深きことを知んぬ。ここをもって聞くところを慶び、獲るところを嘆ずるなりと。（『教行信証』「総序」）

として、「真宗の教行証を敬信」することと「如来の恩徳深きことを知」ることを挙げている。また、『教行信証』「行巻」は「伝承の巻」と称されるが、その「行巻」を受けるために親鸞は「別序」を付して「信巻」を開き、その「別序」の冒頭に「如来選択の願心」、「大聖矜哀の善巧」を背景とする「信楽を獲得すること」と「真心を開闡すること」を掲げている。親鸞が『教行信証』を製作した本意は、「信心」の確立にあったのである。したがって「信巻」の本論において、丁寧に「三心一心問答」を展開しているのである。親鸞の学問は、「如来選択の願心」を自己に証明すること、上原専禄の言葉で言えば「自分が変わる」ということ、に見定められていたと言えよう。

阿部謹也氏は自らの学問に対する姿勢を「自分のなかに歴史をよむ」と表明した。そのことを親鸞の思想研究に即して言えば、「自分のなかに如来大行をよむ」と言えるのではなからうか。親鸞は「自分のなかに如来大行をよむ」ことで、人類救済の思想を自己の「信心」において明らかにした。『教行信証』を研究するということは、必ず学問主体の思想的営為でなければならないのである。

現代に生きる私が親鸞に迫り、さらに親鸞が私の思想となるべく迫ってくる学問、すなわち自己に因縁する諸問題と格闘する私においてのみ真宗学が成立するのではなからうか。日々の歩みの中で、私に繰り返し繰り返し「自分が変わる」ことを求める学問、ここに私の願う真宗学があるように思われる。

2012(平成24)年度「指定研究」等研究組織一覧

【特定研究】

研究名	研究課題及び研究組織
「建学の精神」 教育推進研究	研究課題 大谷大学建学の精神の具現化 研究代表者 草野 顕之(学長・教授・日本仏教史学) 研究員 木越 康(チーフ・准教授・真宗学) 望月 謙二(教授・国語科教育) 渡辺 啓真(教授・倫理学) 福島 栄寿(准教授・日本史学) 富岡 量秀(講師・真宗学・幼児教育学) 西本 祐攝(講師・真宗学) 研究補助員 (RA) 拝原 祥子(博士後期課程第3学年)

【指定研究】

研究名	研究課題及び研究組織
国際仏教研究	研究課題 諸外国における仏教研究の動向の把握と資料の整理・収集・公開 研究代表者 井上 尚実(准教授・真宗学) 研究員 新田 智通(講師・仏教学) 藤枝 真(准教授・哲学・宗教学) 松浦 典弘(准教授・東洋史学) 嘱託研究員 Michael Pye(マールブルク大学名誉教授) Mark L. Blum(ニューヨーク州立大学教授) Paul Watt(早稲田大学留学センター教授) 羽田 信生(毎田周一センター所長) Michael J. Conway(本学非常勤講師) 研究補助員 (RA) 亀崎 真量(博士後期課程第3学年) (RA) 河邊 啓法(博士後期課程第3学年)
西藏文献研究	研究課題 チベット語文献及びバリー語貝葉写本のデータベース化 研究代表者 福田 洋一(教授・仏教学) 研究員 兵藤 一夫(教授・仏教学) 松川 節(教授・東洋史学・人文情報学) 三宅 伸一郎(准教授・チベット学) 嘱託研究員 白館 戒雲(本学名誉教授) 清水 洋平(本学・名古屋大学非常勤講師) 宮本 浩尊(元任期制助教・仏教学) 太田 露子(本学非常勤講師・仏教学) 高本 康子(群馬大学非常勤講師) 西沢 史仁(東洋文庫研究部嘱託) 研究補助員 (RA) 永藁 知也(博士後期課程第3学年) (RA) 稲葉 維摩(博士後期課程第3学年)

【資料室】

名 称	研 究 課 題 及 び 研 究 組 織
大谷大学史資料室	研 究 課 題 大学史関係資料の収集・整理 室 長 采 肇 晃 (研究所主事・准教授・仏教学) 嘱託研究員 戸 次 顕 彰 (本学非常勤講師) 研究補助員 (RA)吉 田 仁 美 (博士後期課程第3学年)
東本願寺海外布教資料室	研 究 課 題 大谷大学図書館所蔵「東本願寺旧蔵資料」海外布教関係部分の整理 室 長 桂 華 淳 祥 (教授・東洋史学) 研究補助員 (RA)濱 野 亮 介 (博士後期課程第3学年)
デジタル・アーカイブ資料室	研 究 課 題 大谷大学所蔵貴重資料のデジタル・アーカイブの構築 室 長 采 肇 晃 (研究所主事・准教授・仏教学)

2012(平成24)年度「指定研究」等研究目的紹介

「建学の精神」教育推進研究

大谷大学建学の精神の具現化

研究代表者・学長 草野 顕之
(日本仏教史学)

本研究班は、「建学の精神」の具現化を課題とし以下の3つの視点から研究を推進するものである。なお、「建学の精神」とは直接には大谷大学初代学長清沢満之による「開校の辞」と、第三代学長佐々木月樵の「大谷大学樹立の精神」を指す。

- ①「建学の精神」の現代的表現化
- ②「人間学Ⅰ」の共通資料集の作成
- ③「建学の精神」を活かした学科教育の在り方

昨年度、視点①を先行して研究活動を進めてきた中で、以下の3つの内容が研究課題として明らかになった。本年は、以下のテーマ・目的に沿って研究を進める。

《1》近代化過程における「宗教学校」・「宗教教育」の位置に関する研究

ここでは、近代化過程における「宗教教育」をめぐる問題点の整理を目的とする。まず、専門学校令と大学令における明治・大正時代の文部省の意図と、文部省の宗教や宗教教育についての具体的な取り組み（例えば、宗教政策等）をみていく事で、文部省が宗教と教育の関係をどのように位置付けていたのかを確認する。この点を確認するために、専門分野の講師を招いての研究会を開催する。その他、明治時代における仏教史・教育史に関する研究も視野に入れつつ確認する。

《2》本学における「建学の精神」の位置に関する研究

ここでは上記《1》をふまえ、清沢満之の「開校の辞」と佐々木月樵の「大谷大学樹立の精神」の持った意味を考察し、その現代的表現化をはかる。具体的には、研究員による両訓辞の研究整理を行う。

《3》現代における仏教系大学の現状と課題に関する研究

ここでは、仏教系大学における「建学の精神」自己表現の調査のため、「仏教と教育の関係性に関する哲学的・臨床的研究—「心の教育」の所在を探る—」（研究

代表者：皇 紀夫 研究課題番号：18530631）の科研報告の研究成果を引き継ぐことと、適宜必要であれば研究員による大学訪問を行う。

国際仏教研究

諸外国における仏教研究の動向の把握と資料の整理・収集・公開

研究代表者・准教授 井上 尚実
(真宗学)

英米班

〈研究テーマ〉

- ①英語圏における仏教研究動向の把握
- ②真宗・仏教関係文献の翻訳、シンポジウムの企画

〈活動内容〉

- ①真宗・仏教関係の国際学会大会参加
ヨーロッパ宗教学会（8.23-26 スtockホルム）、国際真宗学会欧州地区大会（8.31-9.2 デュッセルドルフ）、アメリカ宗教学会（11.17-20 シカゴ）等に研究員を派遣し、情報収集・研究交流を行う。
- ②佐々木月樵「大谷大学樹立の精神」英訳出版
昨年度末で全体の翻訳を終えたので、訳語の統一など編集作業を行い、研究所紀要に掲載できるように形を整える。
- ③真宗近代教学アンソロジー *Cultivating Spirituality* (SUNY, 2011) の出版を記念したシンポジウムの企画
2013年度にシンポジウムを開催できるように企画立案し、準備を進める。
- ④公開講演会の開催
国内外で活躍している仏教学・真宗学関係の研究者を招聘し、公開講演会を4回程度開催する。第1回目は6月末にアラスカ大学の阿満道尋氏による講演を予定。
- ⑤真宗・仏教関係の新刊書・研究論文の書誌データ収集と整理
電子ジャーナル掲載論文を含めた欧文の仏教学・真宗学関係新刊データを集めて整理し、公開できるように準備する。

ドイツ・フランス班

〈研究テーマ〉

仏教・他宗教比較研究

- ①「プロテスタント神学との対話研究、および翻訳出版」
- ②「近代化と宗教：主に浄土真宗の社会的観点からの研究、および翻訳出版」

〈研究の目的〉

- ①「プロテスタント神学との対話研究、および翻訳出版」

浄土真宗とプロテスタント神学との対話・比較研究を継続し、その成果を出版することが本研究の目的である。

具体的な研究として、マールブルク大学神学部教授 Dietrich Korsch氏の *Martin Luther : Eine Einführung* の翻訳出版を計画している。本書は数多あるルター研究書の中でも、ルターの文化史的影響を中心に考察した稀な本であり、日本語で出版する意義は大きい。

また、2012年8月31日～9月2日にドイツ・デュッセルドルフで開催される「第16回ヨーロッパ真宗学会」に参加し、口頭発表をすることが計画されている。

“The Importance of Sangha”と題された今回の学会で発表・交流することで、ドイツ語圏における真宗および仏教研究の潮流を確認するというねらいがある。

- ②「近代化と宗教：主に浄土真宗の社会的観点からの研究、および翻訳出版」

フランス国立高等研究院 (EPHE) の宗教社会学部門との交流を継続していく。具体的な研究として、2010年5月に“National Identities and Religion : A French-Japanese Comparative Approach”というテーマのもとで開催されたシンポジウムの口頭発表をもとに、発表者 (ロバート・F・ローズ、井上尚実、村山保史、飯田剛史、藤枝真、番場寛) が発表原稿を英語・フランス語で論文化している。これらの論文を、EPHEのフィリップ・ポルティエ教授の協力を得て、フランス語で出版する予定である。

東アジア班

〈研究テーマ〉

中国華北・東北・東部モンゴル地域の宗教と文化の研究

〈研究目的〉

中国華北地域、東北地域 (いわゆる満洲)、東部モンゴル地域 (内モンゴル自治区東部) における宗教及び関

連文化の諸相を、歴史史料によって再構成し、さらに現地調査によって明らかにしていく。

〈研究方法〉

本学と中国・東北師範大学 (吉林省長春市) との学術提携ならびに中国社会科学院歴史研究所 (北京市) との学術協定に基づき、双方の研究者が往来して本テーマに関わる共同研究会を実施する。また、現地関係者の協力を得て当該地域に存する仏教遺跡あるいは近時急速に復興しつつある仏教寺院など宗教施設の探訪調査を行う。

〈研究計画〉

共同研究「中国華北・東北・東部モンゴル地域の宗教と文化」の推進

- 1) 前記研究機関より研究者を招聘し、共同研究ならびに公開研究会を開催する。
- 2) 東部モンゴル地域及び華北・東北地域における仏教文化の諸相について、現地調査を行う。

西藏文献研究

チベット語文献及びパーリ語
貝葉写本のデータベース化

研究代表者・教授 福田 洋一
(仏教学)

大谷大学は北京版チベット大蔵経や貴重な蔵外文献などをはじめとする多数のチベット語文献、タイ王室寄贈の多数のパーリ語貝葉写本を所蔵している。これらは、本学はもとより国内外のチベット研究やパーリ仏教研究のための重要な資料となっている。本研究は、これら本学所蔵の重要な文献資料を

- (1) 専門の研究者が十分に活用できるよう整理し、データベース化すること
 - (2) 重要・貴重と思われるものについては電子テキスト化・デジタル画像化して公開すること
- を目的としている。この目的を達成するために、2012年度は以下の研究をおこなう予定である。

1. チベット語文献の電子テキスト化

本学所蔵のチベット語文献のうち稀覯書であるツァンナクバ『量決訳註』および『サンブ明鏡史』を主な研究対象とする。『量決訳註』については、最も分量の

多い第一章について、そこに含まれているダルマキールティの『量決訳』偈の部分が一目で分かるようにし、偈のサンスクリット・テキストも掲げ、偈と註釈との対応関係がわかるように工夫した校訂テキストのPDFファイルをネット上で公開する予定である。『サンブ明鏡史』については、その電子テキストおよび訳注の作成をおこなう。また『中論』『入中論』に対するツォンカパによる註釈の電子テキストの校訂も行う。

2. 北京版チベット大蔵経の写真撮影とネット上での公開方法の検討

北京版チベット大蔵経のうちテンギュルの撮影を継続するとともに、蓄積された画像データの公開方法について検討する。また、公開中の北京版チベット大蔵経オンライン目録のデータを見直し、必要な修正を施す。さらに、大谷大学所蔵蔵外文献目録の電子データについてもネット上での公開をめざす。

3. パーリ語貝葉写本のデジタル化

本学所蔵の稀覯写本『マハーブッダグナンヴァータ・アッタカター』のローマナイズを進めるとともに、重要あるいは貴重な写本の撮影と整理をおこない、デジタルデータ公開に向けての検討をおこなう。

4. 寺本婉雅の日記の翻刻

村岡家所蔵・寺本婉雅関連資料に含まれる寺本婉雅の二種類の日記のうち、刊行済みの『蔵蒙旅日記』では記述の薄い／記述のない1899. 9. 1～1900.12.31 [最終記事は1900. 7.27] 間の日記(『新旧年月事記』の表題を持つ)の翻刻と研究をすすめる。

5. 海外の研究者、研究機関との交流

中国・北京の中国蔵学研究センターにおいて開催される第5回北京チベット学国際セミナー(8月1日～5日)に参加する。随時、海外のチベット学研究者による公開研究会を開催する。本学所蔵のパーリ語貝葉写本の価値を世界に知らせるとともに、写本研究の最新動向を知るために、アイルランドのChester Beatty Libraryで開催される写本関係国際シンポジウムに参加する。また、タイ・バンコクの寺院でのパーリ語貝葉写本調査をおこなう。

大谷大学史資料室

大学史関係資料の収集・整理

室長・准教授 采翠 晃
(仏教学)

真宗総合研究所設立当初より「真宗学事研究班」「大学史編纂研究班」「大谷大学史研究班」などと、幾度にもわたる組織改編を経て、現在の「大谷大学史資料室」となっている。本資料室が担うのは、大谷大学の大学史を彩ってきた様々な資料を、収集、整理、保存した上で、それらを公開して活用し資するという任務である。これまでの成果として、『大谷大学近代一〇〇年のあゆみ』『大谷大学百年史』『清沢満之全集』『臘扇記注釈』『真宗学事史年表』などを刊行してきた。

大学が自らの出自を明らかにすることは、その存在意義を明確にする上で避けては通れない、重要な意義を持っている。このことは、大谷大学のみならず多くの大学においても言えることである。99機関が加盟する「全国大学史資料協議会」(<http://www.universityarchives.jp/>)への参加は、志を同じくする様々な機関との連携やノウハウの共有などといった効果が期待される。

また、上述のような少なからぬ刊行によって、既にある程度の収集・整理はなされてきたものの、依然として十分な整理できていない資料がある。これらを適切に評価し整理した上で、少しずつでも公開できるようにしていく。

その第一歩として、図書館の入り口付近に大学史史料展示のための展示ケースを、昨年度より借り受けることができた。このスペースを活用して、これまでの蓄積を公開していきたい。また、このささやかな展示によって、多くの関係者の関心を喚起することも意図している。

東本願寺海外布教資料室

大谷大学図書館所蔵
「東本願寺旧蔵資料」
海外布教関係部分の整理室長・教授 桂華 淳祥
(東洋史学)

大谷大学図書館所蔵「東本願寺旧蔵資料」に含まれる海外布教関係部分は、おもに20世紀前半における東本願寺の海外布教に関する公文書の綴りで、当時の海外布教の実態を伝える貴重な資料である。しかしそれは事務書類綴りのまま未整理の状態に残されているもので、その内容はもとより点数すら正確には把握されていない。したがってこの状態が続けばその存在も知られず、あるいは散逸の恐れもある。

本資料室の目的は、これら未整理の資料を整理して「資料一覧」を作成するとともに、資料自体を適正な形態にまとめて保存することにある。これによって本資料の半永久的な保存が可能になり、今後、当該時代の東本願寺の活動をはじめとする様々な分野の研究に寄与することが期待される。

本資料の整理は、最初は真宗総合研究所の指定研究「国際仏教研究(中国班)」の活動の一環として行われてきていたが、それが急務であることから昨年度より専従の組織として本資料室を置くこととなった。したがって整理・保存の手順も、作業をより円滑にするため若干の修正は加えているものの、基本的には従来のそれを踏襲して進めている。具体的な方法は下記の通り。

- ①事務書類綴りの状態になっている資料について内容を確認し、必要事項をカードに記録する。
- ②内容を記録したカードにしたがって「資料一覧」を作成する。
- ③内容を確認した資料を適正な形態にまとめて保存可能な状態にする。

資料にはおおそ書類1綴りを1点として仮番号を付して、総べて165。資料1点内の書類の件数には多寡があるので綴り数での具体的な数字は示しにくいですが、昨年度はこのうちの27綴り(前年度からの継続も含む)の整理を完了し、新たに15綴りについて着手しているため、本年度もこのペースでの作業進行を見込んでいる。

デジタル・アーカイブ資料室

大谷大学所蔵貴重資料
のデジタル・アーカイブの構築室長・准教授 采罌 晃
(仏教学)

コンピューターとネットワークの発達によって、現在ではデジタル・データ化された資料が多く求められるようになってきた。

本学は多くの貴重な資料が所蔵しているが、それらの多くはじかに現物に接しない限りは利用できない状況になっている。この状況は、利用促進の側面からはいうまでも無く、資料保存の側面からも決して望ましいものではない。

また、多くの学内学会を有する大谷大学では、様々な学術刊行物が発行されているが、それらの利用もいまだ決して十分とは言えない。

これらのものをデジタルデータとして保存し、また積極的に公開していくことで、大谷大学の学術研究データベース・リポジトリの構築を企図する。これは、大谷大学の学術情報社会におけるプレゼンスを高めることにも資するであろう。

上記のような目論見のもと、貴重資料のデジタルデータ化を進めるとともに、その公開システムの構築にも取り組む。

このほか、「本学図書館所蔵古典籍のデータベース化」を継続するとともに、新たに、京都府立鴨沂高等学校(高大連携協定校)が所蔵する映像資料のデジタル化に着手する計画である。

2012(平成24)年度「一般研究」研究組織一覧

【共同研究】

研究名等	研究課題及び研究組織
【2010～2012年度科研採択】 一般研究（渡部班）	<p>研究課題 元朝期～明朝初期の言語接触に関する文献学的研究</p> <p>研究代表者 渡部 洋（准教授・中国語・近世の中国語文法）</p> <p>研究員 松川 節（教授・東洋史学・人文情報学）</p> <p>協同研究員 小野 浩（京都橘大学教授） 古松 崇志（岡山大学准教授） 石野 一晴（日本学術振興会特別研究員） 毛利 英介（京都大学非常勤講師）</p> <p>研究協力員（支援）伴 真一郎（博士後期課程修了）</p>
【2010～2012年度科研採択】 一般研究（池上班）	<p>研究課題 日本における西洋哲学の初期受容 一清沢満之の東京大学時代未公開ノートの調査・分析—</p> <p>研究代表者 池上 哲司（教授・倫理学）</p> <p>研究員 加来 雄之（教授・真宗学） 門脇 健（教授・宗教学） 朴 一功（教授・西洋古代哲学） 村山 保史（准教授・西洋哲学）</p> <p>協同研究員 藤田 正勝（京都大学大学院教授） 竹花 洋佑（本学非常勤講師） 西尾 浩二（本学非常勤講師・特別研究員） 竹中 正太郎（任期制助教）</p>
【予備研究】 一般研究（加来班）	<p>研究課題 曇鸞撰『讚阿弥陀仏偈并論』の原初形態の復元とその思想史的意義</p> <p>研究代表者 加来 雄之（教授・真宗学）</p> <p>研究員 Robert F. Rhodes（教授・仏教学）</p> <p>協同研究員 金子 彰（東京女子大学教授）</p> <p>研究協力員 (RA)青柳 英司（博士後期課程第3学年）</p>
【予備研究】 一般研究（鈴木班）	<p>研究課題 ジュラ紀放散虫群集の数値年代</p> <p>研究代表者 鈴木 寿志（准教授・地質学・古生物学）</p> <p>研究員 柴田 みゆき（准教授・情報処理学）</p> <p>協同研究員 周藤 正史（ポツダム大学） 辻野 泰之（徳島県立博物館主任研究員） 小木 曾哲（京都大学准教授）</p> <p>研究協力員（支援）Dr. Diersche, Volker（ドイツ・バイエルン・ミュンヘン在住） （支援）三上 禎次（龍谷大学非常勤講師）</p>
【予備研究】 一般研究（徳岡班）	<p>研究課題 保育者の資質向上へ向けたりカレント・モデル・カリキュラムの開発</p> <p>研究代表者 徳岡 博巳（教授・児童福祉学）</p> <p>研究員 藤本 芳則（教授・日本児童文学） 山内 清郎（准教授・教育人間学・臨床教育学） 亀田 十未代（講師・保育学） 中田 千穂（講師・体育学） 西村 美紀（講師・教育学・異文化間教育学）</p>
【予備研究】 一般研究（三宅班）	<p>研究課題 ラグ・ヴィラ博士の中国旅行記の和訳研究</p> <p>研究代表者 三宅 伸一郎（准教授・チベット学）</p> <p>研究員 Dash Shoba Rani（講師・インド学・仏教学）</p> <p>協同研究員 李 学竹（中国蔵学研究中心研究員） Dash Anirban（チベット学中央大学講師）</p>

【個人研究】

研究名等	研究課題及び研究組織	
【2010～2013年度科研採択】 一般研究（阿部班）	研究課題 研究代表者	変動期の社会における法秩序の再構築—南アフリカとカンボジアの比較社会学的研究 阿部利洋（准教授・社会学）
【2010～2013年度科研採択】 一般研究（飯田班）	研究課題 研究代表者	民族文化祭の比較研究 飯田剛史（教授・社会学）
【2010～2012年度科研採択】 一般研究（古川班）	研究課題 研究代表者	世界史における東アジアとアフリカ—国際共同研究のための基盤形成— 古川哲史（准教授・歴史学/比較文化・社会論）
【2011～2014年度科研採択】 一般研究（ダシュ班）	研究課題 研究代表者	日本で発見されたオリアー語『マハーバーラタ』『津島貝葉』の校訂テキスト作成 Dash Shoba Rani（講師・インド学・仏教学）
【2011～2012年度科研採択】 一般研究（許班）	研究課題 研究代表者	国会図書館所蔵「朝鮮筆記」の研究—かな書き朝鮮語に着目して— 許秀美（任期制助教・特別研究員）
【2011～2012年度科研採択】 一般研究（西尾班）	研究課題 研究代表者	プラトンの中期イデア論の生成 西尾浩二（本学非常勤講師・特別研究員）
【2011～2013年度科研採択】 一般研究（箕浦班）	研究課題 研究代表者	本地物語の研究—菩薩行と誓願を視座として— 箕浦尚美（本学非常勤講師・特別研究員）
【予備研究】 一般研究（松川班）	研究課題 研究代表者	新出土仏教遺物と文献史料の統合による13～17世紀北アジア史の再構築 松川節（教授・東洋史学・人文情報学）
【予備研究】 一般研究（李班）	研究課題 研究代表者	作家疑滞文学からみる「満洲国」時代の中国文人の心象風景に関する研究 李青（教授・中国現代文学・中国語）
【本研究】 一般研究（川端班）	研究課題 研究代表者	日本中世における治水・利水に関する史料的研究 川端泰幸（任期制講師・日本中世史学）
【予備研究】 一般研究（三浦班）	研究課題 研究代表者	日本における子供向けシェイクスピア翻案物の研究 三浦誉史加（講師・英文学・英米文化）

※科学研究費助成事業採択にともなう、一般研究班新規採択及び研究組織の変更は、次号に掲載する。

2012(平成24)年度「一般研究」研究目的紹介

共同研究

元朝期～明朝初期の言語接触に関する文献学的研究

研究代表者・准教授 渡部 洋
(中国語・近世の中国語文法)

本研究の目的はモンゴル語と漢語のバイリンガル史料を始めとする多言語史料を文献学的に研究し、元朝から明朝初期に於ける多言語接触下の言語状況を明らかにするための基礎資料を作成することにある。

我々研究班は平成21年に大谷大学より一般研究の研究費を得て中国における現地調査と資料収集を行った後、続く翌年平成22年には科学研究費補助金を受けモンゴル国ハラホリン市のエルゲニゾー寺院を始め各地の遺跡や碑石の調査を行った。これらの調査によって我々は予想をはるかに越える収穫を得ることができた。また、月に一二度の研究会を通してバイリンガル史料に関するデータもかなり多く蓄積することができた。現時点における我々の課題はこれらの収穫やデータをどのようにまとめ整理していくかという点にある。我々の成果の一つとして、先般その一部を訳注(『漢文・モンゴル文対訳「達魯花赤竹君之碑」訳注稿』)という形で『大谷大学真宗総合研究所紀要第29号』に発表した。漢文の訳注については研究班メンバーの古松氏、毛利氏、石野氏の緻密な作業により極めて完成度の高いものになった。また、モンゴル語の訳注に関しても松川氏を始めとする小野氏、伴氏、清水女士等の研究班メンバーによる精力的な作業のおかげで広範囲にわたる豊富な知識を盛り込むことができた。更にこの訳注の後に東洋文庫所蔵の拓本の写真を載せ漢文とモンゴル語の文字について確認できるようにしたことにより、この研究分野の参考資料としても非常に有用なものになったと考えている。

今後の具体的な活動としては以下三点を計画している。

一点目は、すでに解説した下記の碑文についてのデータを整理し各碑文の訳注を作成することである。

- 1 張氏先塋碑
- 2 勅賜興元閣碑

3 西寧王忻都公神道碑

4 少林寺聖旨碑

5 也可合敦大皇后懿旨并妃子懿旨碑

6 イスンケ紀功碑

二点目は、甲種本「華夷訳語」の訳注と語彙索引の作成である。この「華夷訳語」は明王朝とモンゴル民族との関係を知る上で非常に重要な史料であるばかりでなく、当時のモンゴル語及び漢語の研究にとっても有益な言語史料として位置づけられる。特に「華夷訳語」の中の漢語の総訳と傍訳には口語の語彙が多く見られることから「元朝秘史」や「孝経直解」等の口語史料に見られる語彙と比較検討すれば、当時の所謂「漢児言語」の研究に役立つのではないかと考えている。

三点目は、これまで解説を行ってきた碑文と「華夷訳語」についてのデータベースの作成である。このデータベースが完成すれば、元代から明代初期にかけての「多言語接触」下の言語状況を明らかにするための基礎資料として活用できるものと考えている。

共同研究

日本における 西洋哲学の初期受容 —清沢満之の東京大学時代 未公開ノートの調査・分析—

研究代表者・教授 池上 哲司
(倫理学)

1878年に東京大学は最初の外国人哲学教師としてフェノロサ(Ernest Francisco Fenolosa, 1853-1908)を招聘している。東京大学におけるフェノロサの担当科目は哲学、政治学、理財学(経済学)であった。彼が講義を通じて多くの思想家たちに影響を与えたことは聴講者の回想として伝えられているが、信頼に値するフェノロサの哲学関係の講義記録はこれまで未公開であった。

本研究の目的は、西方寺(愛知県碧南市)で発見された清沢満之(1863-1903)の遺稿(現在は、カラーフィルム化ないし文字データ化された「西方寺所蔵史料」として大谷大学が所蔵)中に発見された東京大学

(大学院) 在学時の哲学関係講義録の全体を翻刻してフェノロサを中心とする東京大学の外国人哲学教授たちの講義内容を公開することであり、この作業を通じて日本における最初期の哲学思想受容過程の一側面を解明することである。

こうしたわれわれの調査・分析作業は、(1)第一次作業(調査編集作業)および(2)第二次作業(思想分析作業)に分けられるが、2012年度の本研究では、第一次作業(調査編集作業)を継続しつつ、第二次作業(思想分析作業)を重点課題とし、実施する。

第二次作業を具体的に言うなら、(a)講義録の講義がいつの、どの外国人哲学教師によるものなのかを明確にし、他の周辺資料(東京大学等が所蔵する授業関係資料、清沢自身の文献、当時東京大学に在学していた清沢以外の者が講義に言及している文献等)との比較を通して清沢ノートの思想分析作業を行ったうえで講義録を編集する。(もっとも、清沢以外の学生によるフェノロサ講義ノートの内容がそれぞれ相当に異なっているため、フェノロサ自身の講義内容の変化をも明らかにする必要がある。)

さらに、(b)清沢の西洋哲学思想受容の思想的分析を行う。より詳細には、後の清沢自身による講義、論文、著作への影響関係を考慮しつつ、清沢の西洋哲学思想受容の内実を解明する。その第一歩として、まずフェノロサによる哲学史講義と清沢自身による西洋哲学史講義との比較分析を行う。

(a)(b)の成果は、まずホームページや公開講演会において公開し、次いで学術論文において公開する。

共同研究

曇鸞撰『讚阿弥陀仏偈并論』 の原初形態の復元と その思想史的意義

研究代表者・教授 加来 雄之
(真宗学)

本共同研究は、曇鸞撰「讚阿弥陀仏偈并論」の原初形態の復元と、それにもとづく曇鸞浄土教について思想史的研究を行うための基盤を構築することを目的とする。

具体的には、曇鸞の撰述である『讚阿弥陀仏偈』(以

下、『讚弥陀偈』)と『略論安楽土義』(以下、『略論』)の現存する諸テキストを検証して、「讚阿弥陀仏偈并論」の原初形態を復元し、曇鸞の浄土教思想の中国日本浄土教における歴史的意義を明らかにするための基盤を構築する。

北魏から北齊にかけて活躍したとされる曇鸞は、在世当時の南北仏教界のみならず、それ以降の中国・日本の浄土教形成において大きな影響を与えた。曇鸞の浄土教関係の著述は『無量寿経優婆提舍願生偈註』(以下、『浄土論註』)と『讚弥陀偈』と『略論』の三部とされる。これまでの思想研究は『浄土論註』が中心であったが、迦才の『浄土論』における曇鸞の著述の紹介の仕方などを通すと、曇鸞の浄土教、あわせて後代における曇鸞浄土教の受容を考えるうえで『讚弥陀偈』『略論』が重要な意味をもつことは明らかである。なぜなら、この二書にこそ曇鸞の独創的な浄土教理解が直接的に表現されているからであり、またこの二書の性格は、『大無量寿経』の讚偈と論義として位置づけることができるように、中国日本の浄土教における『大無量寿経』の地位の確立に大きな役割を果たしたからである。『讚弥陀偈』と『略論』とが本来、「一具」もしくは「一部」であったことは、従来から指摘されている。『讚阿弥陀仏偈并論』の形態を残すものとして、敦煌出土本(英国博物館蔵スタイン本、龍谷大学蔵赤松本の二本)と、来迎院蔵良忍手沢本『〔讚阿弥陀仏偈并論〕』『安楽土義』がある。ところが『浄土論註』と『讚阿弥陀仏偈并論』との有機的関係を主題とした総論的な研究は、一部の萌芽的なもの(八木昊恵など)を除いてほとんど見ることができない。

この度、注目する良忍手沢本は、『讚弥陀偈』『略論』の日本最古の写本であり、テキストの校異として紹介されたことはあるが、その精緻な訓点については注目されていない。執筆僧・葉源の手になる訓点は良忍の浄土教理解と無関係ではないだろう。あわせて大谷大学蔵円空本模写本の『讚阿弥陀仏偈』、親鸞の『讚阿弥陀仏偈』引用箇所、隆寛の『略論安楽土義』引用箇所等の訓点についての調査研究を実施し、日本浄土教における曇鸞浄土教の受容の実態に迫るための準備研究を行う。この研究は、良忍—観空—源空—親鸞・隆寛・長西等の師弟関係に注目することにより、源信から始まる北嶺の浄土教における曇鸞浄土教の受容過程を解明する可能性も探ることになろう。

共同研究

ジュラ紀放散虫群集 の数値年代

研究代表者・准教授 鈴木 寿志
(地質学・古生物学)

日本列島の基盤には、中生代ジュラ紀に形成された付加地体群が幅広く分布している。この地体群は1億数千万年前の海洋プレートが、当時のアジア大陸縁辺域へ沈み込む際に形成されたと考えられる。その年代は主に珪質殻をもつプランクトンの化石(放散虫)によって明らかにされる。京都盆地周辺の山々もジュラ紀に形成された付加地体群(丹波地体群)である。最近、研究代表者は京都東山および松ヶ崎丘陵から放散虫化石を発見し、地質年代がそれぞれジュラ紀中世～新世およびジュラ紀中世であることを明らかにした。(鈴木ほか、2011、および真宗総合研究所2010年度研究成果：鈴木、2011)。

放散虫化石は、日本の基盤地質の年代を明らかにする上でたいへん重要な示準化石であるが、その化石帯はジュラ系層序が確立されたヨーロッパにおいて基準的な化石であるアンモナイト化石帯と部分的にしか対比されていない。その結果、国際的な地層対比において精度を欠くこととなり、より踏み込んだ議論が展開できない状態にある。また化石そのものからは「今から〇〇年前」という数値年代は分からない。昨年研究代表者の鈴木は、ドイツのDiersche博士とともにドイツ南部～オーストリーの野外調査を行い、アルプス山脈北部の含放散虫堆積岩層の間に火山起源の鉱物を含む凝灰岩層を発見した。ジュラ紀層でのこのような例は世界的にも極めて稀である。火山起源の鉱物は、当時のマグマから直接固結したので、鉱物中に含まれるカリウムやアルゴンの同位体を測定することで数値年代を明らかにすることができる。そこで本研究では、それぞれの専門家である研究分担者と協力し、以下の研究を進めていく(括弧内は研究分担者)。

- (1)アンモナイトと放散虫が共に産する地層の調査、およびアンモナイト化石の採集もしくは博物館標本の再検討(アンモナイト化石の専門家である徳島県立博物館の辻野泰之博士)。
- (2)凝灰岩の顕微鏡観察・記載(火山岩岩石学者である京都大学大学院の小木曾哲准教授)。

(3)凝灰岩中の鉱物のAr-Ar年代測定(ポツダム大学放射年代測定実験室のSudo博士)。

(4)放散虫化石の検出と電子顕微鏡観察。

(5)地質柱状図と化石種の出現・絶滅層準の対比、コンピュータを用いた解析(本学人文情報学科の柴田みゆき准教授)。

これらの研究により、これまで曖昧であったジュラ紀放散虫化石のアンモナイト化石帯中での位置づけが明確となり、さらに数値年代が具体的に示されると期待される。

文献 鈴木寿志ほか(2011)：自然と環境、第13巻、15-26。

鈴木寿志(2011)：真宗総合研究所報、第59号、23-24。

共同研究

保育者の資質向上へ向けた リカレント・モデル・ カリキュラムの開発

研究代表者・教授 徳岡 博巳
(児童福祉学)

現在、幼稚園や保育所においては、多様な発達課題を有する子どもたちへの対応や保護者支援、地域の子育て支援など、果たすべき役割や課題がより複雑になってきている。そこで従来の幼稚園教諭・保育士(以下、「保育者」)養成における教育内容や方法に改革が求められているのである。と同時に、新人保育者にとってこのような現場に入っていくことはハードルが高く、その後も困難さを抱え続けていることが見て取れる。卒業生が現場に出て一人前の保育者として成長するまでをフォローアップすることは、保育者養成を担う大学としての責務であると考えられる。

そのためには、養成期間の延長や、単なる新しい情報の伝達といった表面的なカリキュラムの操作だけでは限界があり、新たなくより広義の意味での保育者養成への考えを導入する必要があるだろう。それは、単に従来の授業内容・形態のさらなる拡充・高度化を目指すものではなく、教育・保育の日常を支える文化性の基盤を、学生、現職保育者、大学教員がともに学びあう中で豊饒化し、保育の文化性そのものを向上させ

る力を培うものである。

そこで本研究では、保育者の資質向上へ向けたリカレント・モデル・カリキュラムの開発を目的とする。その際には、保育者養成課程を完成教育としてではなく、より完成された保育者への準備教育と捉え、卒業後も日々の教育・保育活動の中で自分自身をふりかえり、成長し続ける保育者像を目指す。養成期間を単に延長するのではなく、養成校での学びから現場を経て、また養成校へと循環する中で、幼児教育・保育文化の再構成を構想する。それによって現在の幼児教育・保育現場の困難な課題への対応に必要な専門性のあり様や養成方法を解明する。

なお、本研究は(A)社会福祉学分野における学習方法としての事例研究の方法論の蓄積(B)臨床教育学の方法論によるリカレント教育・協働的探求の蓄積(C)技の伝達としての専門性継承のための枠組み、伝承されるべき文化内容についての分析・検討、をふまえて、<より広義の意味での保育者養成>のモデルカリキュラム開発を試みるものである。

共同研究

ラグ・ヴィラ博士の 中国旅行記の和訳研究

研究代表者・准教授 三宅 伸一郎
(チベット学)

本研究は、20世紀インドを代表する東洋学者にして政治家であり、アジアの貴重な古典文献を収集・保存するとともに、「Śatapīṭaka Series (百蔵)」の名のもとにその複製出版をおこなっているInternational Academy of Indian Studiesの創設者であるラグ・ヴィラ (Raghu Vira, 1902–1963) 博士の中国旅行記*Prof. Raghuvira's Expedition to China*. (Śatapīṭaka Series Indo-Asian Literatures, vol. 76, Lokesh Chandra & S.D. Singhal (eds.) , New Delhi : International Academy of Indian Culture, 1969) の和訳作成を目的とする。本書は、博士が1955年4月からの4ヶ月、内モンゴルや青海省などのチベット仏教文化圏を含む中国各地を旅行し、300箱にもおよぶ中国語・チベット語・モンゴル語による様々な分野の文献を収集し、当時の中国首相・周恩来から「インドの支葉」と賞賛された際のヒンディー語による日記である。当時

のインド・中国関係を知る上でも、また、1960年代後半から始まった文化大革命以前の中国の宗教状況を知る上でも極めて重要な資料であるにもかかわらず、ヒンディー語で書かれているため、これまで注目されることはなかった。そこで本研究では、本書の全容とその学術的価値をより深く理解した上で、この重要な資料を広く学会に提供するために、全体の和訳草稿の完成を目指す。和訳草稿の作成は、研究代表者とヒンディー語のネイティブ・スピーカーである研究分担者の2名で定期的におこなう。博士の訪問先である中国の地名や人名などの固有名詞についてはデヴァナーナリ文字による表記しか見られない。和訳草稿作成の際、それらを漢字表記する必要があるが、研究代表者および研究分担者の両名で漢字表記の比定ができない場合、協同研究者・李学竹氏の協力をあおぐ。また、将来的に当該文献の訳注を含めた完全な和訳を目指すため、当該文献の出版元であるInternational Academy of Indian Studiesを訪問し、博士の息子にして理事長であるLokesh Chandra博士より出版の許可と、関係資料の提供を依頼する必要がある。その際、協同研究者・DASH Anirbanの協力を得る。

個人研究

変動期の社会における 法秩序の再構築 —南アフリカとカンボジアの比較社会学的研究

研究代表者・准教授 阿部 利洋
(社会学)

紛争を経験した社会が、その後どのようにして司法の正当性を回復し、社会構成員の法的ニーズに応じていくのか。その過程で、どういった独特の問題が生じ、どのような反応が展開することになるのか。そうした社会における法秩序の再構築は、理論的にはどのように把握できるのか。

これらの問いに対し、本研究は、南アフリカとカンボジアという対照的な社会を比較対象として取り上げ、社会学的な分析手法を用いて答えることを目的とする。また、このアプローチにより、従来、政治学的・法学的考察に限定されがちであった平和構築・移行期の正義研究に、新たな知見を提示することを目指す。4年

間の研究期間における3年目となる本年度は、次の計画で研究を進める予定である。

南アフリカでは、移民問題に関する前年度の調査を踏まえ、「カラード・アイデンティティ・ポリティクス」の台頭に関する調査を実施する。アパルトヘイト後の南アフリカにおいて、移民、とりわけアフリカ諸国からの移民は、「南アフリカ外部の他者」であり、黒人ではあっても南アフリカ人ではないことから排斥運動の対象となっている。他方、カラードは、「南アフリカ内部の他者」として、南アフリカ人であっても（狭義の）黒人ではないことから、近年、政治的・社会的資源の再配分政策の運用の際に不利益を被っているとされる反発が頻出している。その点に関して、Stellenbosch University（ステレンボッシュ）とWitwatersrand University（ジョハネスバーグ）を拠点に現地調査を行う。

カンボジアでは、クメール・ルージュ特別法廷の進行に伴う様々な社会的反応・影響に関する社会学的知見を網羅するため、プノンペンにおいて複数名の関連研究者とワークショップを開催する予定である（9月）。また、前年度の調査を踏まえ執筆した二つの論考（ローカル・オーナーシップおよびローカル・メディアのアジェンダ・セッティング）を仕上げるために、同テーマに関する補足調査およびローカル・メディアの実証分析を実施する。

理論的観点からは、トランジショナル・ジャスティス論の先行研究を踏まえ、二つの移行期社会をつなぐキー概念を整理し、事例比較を盛り込んだ論文を執筆する。前年度の先行研究レビューの際の課題であった「正義という理念に対する複数の解釈・利害が交錯するなかで、各アクターはどのような現実の創出に寄与しているか」や「正義の追求が、その社会にどのような影響を与えているか」といった問いに答えるものにするつもりである。

個人研究

民族文化祭の比較研究

研究代表者・教授 飯田 剛史
(社会学)

目的：

民族文化祭とは、多様なエスニックの人々が、その民族文化を公共の場で祝祭の形で表現しようとする社会・文化運動である。日本では1980年代から大阪で在日コリアンによって始められた祭りを出発点として、今日約30にもものぼる祭りが関西地域を中心に全国で開催されている。

本研究は、民族文化祭運動の全体像を明らかにし、多民族化の社会状況を背景に、在日コリアン、ニューカマー、日本人、その他のエスニックの人々がどのように新たな地域の祭りを創り出し、多民族、多文化共生の住民意識を形成しつつあるのかを解明しようとするものである。

そのために、①日本における民族文化祭の包括的データベースを作成し、②運動開始の経緯、組織、ネットワーク形成、地位との関わり、民族関係などを焦点とする調査を進め、③海外の民族文化運動との比較考察を踏まえて、④日本の多文化共生に向けての現状分析と実践課題を提起する。

本年度は、秋に「民族まつり／マダン全国交流シンポジウム」を京都市東九条地域において開催し、多様な民族文化祭の担い手とともに、民族文化祭運動の資料の収集・総合編集を行い、現状課題と今後の発展方向の解明を進める計画である。

個人研究

世界史における東アジアと アフリカ — 国際共同研究のための基盤形成 —

研究代表者・准教授 古川 哲史
(歴史学／比較文化・社会論)

本研究は世界史の枠組みの中で、筆者が現在まで取り組んできた＜第二次世界大戦期までの日本－アフリカ関係史＞の研究成果を出発点に、対象地域を東アジア(主に中国、朝鮮半島、日本)にひろげて、19世紀末から20世紀半ばにおける東アジアとアフリカ関係を世界史的な視点から明らかにすることを目的とする。従来、世界史あるいはアジア史やアフリカ史において、個別に扱われてきた諸相を繋ぐ接続性を見出す作業であり、その「接点」や「接線」について歴史学的考察を試みる。

本研究は、歴史哲学を含めた理論かつ実証面での個人研究活動であるとともに、この大きなテーマを国際的な規模で論じるための国際共同研究を組織、開始させる意図もある。さらには、筆者の将来的課題の一つ＜世界史における東アジアとアフリカ、アフリカ系ディアスポラの研究＞(East Asia and Africa, and the African Diaspora in World History)に結びつけるという展望を持つ研究である。(本研究は科学研究費補助金による研究でもある。)

本研究の基軸のひとつとなる日本－アフリカ関係史の研究は、日本におけるアフリカ史学の乏しさもあり、先行研究はまだ少ない。筆者は今まで、アフリカ諸国や欧米などの研究者による関連研究も含めて、その既往の研究概観や意義・問題点の分析をいくつかの機会で行ってきた。(例えば、拙稿「アフリカ史——精神と学界の脱植民地化に向けて」、『歴史と地理』651号(2012年2月号)、山川出版社、2012年、同「2007年の歴史学界：回顧と展望——アフリカ」、『史学雑誌』117編第5号、史学会、2008年、同「日本－アフリカ交渉史の諸相を考える——いくつかの研究課題と展望」、『アフリカ研究』72号、日本アフリカ学会、2008年、等である。)日本－アフリカ関係史あるいは関係論研究では、関係が生じた時期の同定など、基本的な事実関係が曖昧なままにされている場合があり、それが他の研究者の論考にまで引用・利用されている問題もある。したがって本研究では、アフリカ人

の姓と名の取り違いや現地の日と西暦の換算の誤りといった点も含めて、先行研究で使われている史・資料の再検証作業を含む。

本研究では、既往の研究成果と分析を踏まえ、筆者の＜日本－アフリカ関係史＞研究を一つの軸に、対象地域を東アジアに拡大し、19世紀末から20世紀半ばにおける東アジアとアフリカ関係を世界史的な視点から明らかにすることを試みる。時代区分や対象地域設定という問題も含めた、大きな枠組みや方法論に関わる理論的研究、いくつかの重要な事例に焦点を当てた実証研究を行っていく。そして、適宜、中間発表などを通じて他者からの批評に耳を傾け研究内容を再検討し、最終的な研究成果を論文や著書などで公表する。

個人研究

日本で発見されたオリアー語 『マハーバーラタ』『津島貝葉』の 校訂テキスト作成

研究代表者・講師 ダシュ ショバラニ
(インド学・仏教学)

本研究の詳細：

研究種目名	科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金(基盤研究(C)))
期間	2011年度～2014年度
研究課題名	「日本で発見されたオリアー語『マハーバーラタ』『津島貝葉』の校訂テキスト作成」

現在、宇和島市教育委員会津島支所教育課に「津島貝葉」という貝葉写本が保管されている。それは、17世紀初頭に書写されたもので、恐らく江戸時代中期(18世紀)頃に日本に伝来したと考えられている。カラニー(Karaṇī)書体を使用し、中世オリアー語で書かれた221葉(両面記載)からなるこの貝葉写本の内容はインド東部・オリッサ州の15世紀半ばの有名な詩人サーララーダーサ(Sāraḷādāsa)によってオリアー語で書かれた『マハーバーラタ』すなわち、『サーララー・マハーバーラタ』(Sāraḷā Mahābhārata)の「森林章」の第1部に相当するものである。

日本における『マハーバーラタ』の研究と言えば、数多くの成果があるが、その殆どがサンスクリット語テキストに基づくものに限られている。サンスクリット語だけでなく、オリアー語を含む様々な地方言語で書かれた『マハーバーラタ』がインドに数多く存在することはあまり知られていない。しかしそれらは、サンスクリット語で書かれた『マハーバーラタ』の単なる翻訳ではなく、それぞれの地方の文化の影響のもと成立した独自のテキストと言える。

筆者は2008年度～2010年度まで「日本で発見されたオリアー語『マハーバーラタ』の研究」という題名で(基盤研究(C)、課題番号20520048)3年間、「津島貝葉」のデジタル化、校訂ノート付きのローマ字転写テキスト(Diplomatic Edition)の作成、物語ごとに題名を付けた組立てや関連資料の収集をした。その際、『サララー・マハーバーラタ』の校訂テキストは45年も前に出版されたものが唯一であること、そしてそこに、数多くの校訂ミスが存在することに気付かされた。このような現状を鑑み、これまでの研究の継続として「津島貝葉」の異本の入手および「津島貝葉」を底本とした『サララー・マハーバーラタ』「森林章」第一部の校訂テキスト(Critical Edition)の作成を目的とする。最終的にはそれを出版する予定である。

個人研究

国会図書館所蔵「朝鮮筆記」の研究—かな書き朝鮮語に着目して

研究代表者・任期制助教 許 秀美
(韓国・朝鮮語学)

対馬および薩摩苗代川で編纂された朝鮮語学書の現存資料の多くは、1960年代に京都大学国文研究室より影印刊行された。しかし、10年ほど前から陸続と発見される新資料によってこの分野の研究は、新たな局面にさしかかってきている。

本研究の代表者は、このような学界の動向に呼応して、精力的に新資料の調査をおこなってきたが、2008年6月、国立国会図書館において、従来学界に知られていない「朝鮮筆記」という写本を発見した。「朝鮮筆記」なる書は、この国立国会図書館本が現伝の唯一本であるものご

とく、他に伝わることを聞かない。本書「朝鮮筆記」において最も注目されるのは、「朝鮮語右訳下訓」の条に収録された全270項目におよぶかな書き朝鮮語語彙である。標題語は漢字で表記され、その右あるいは下にカタカナで朝鮮語語彙の発音が注記されている。

本書「朝鮮筆記」は、写本「加模西葛杜加国風説考」の後ろに合綴されているが、この「加模西葛杜加国風説考」には、「朝鮮筆記」のほか、「文化元子年九月廿九日魯斯亜船渡来国王ヨリ我邦エ呈スルノ書」、「別勒空律安設戦記」、「或間海防漫記」、「琉球談抄書」、「無人島漂着者始末書」、「依崔天滄見殺之事従三使贈対州公之書」、「三使口上」、「傾蓋唱和録」、「鐵函心史抄書」などが収録されている。許秀美他(2009)においては、「加模西葛杜加国風説考」の中に、幕末の探検家最上徳内の言に拠ったと思われる注記があらわれること、さらに「朝鮮筆記」の書名が幕末の八王子千人同心松本斗機蔵が書き残した最上徳内の「蔵書目録」の中に確認できることから、本書前半部の「加模西葛杜加国風説考」と後半部の「朝鮮筆記」がともに最上徳内と関わりをもっている可能性を指摘した。

本研究では、「朝鮮筆記」が合綴されている、「加模西葛杜加国風説考」他9条目について文献学的考察をおこない、「朝鮮筆記」の成立過程をさらに詳しく明らかにする。さらに、「朝鮮筆記」につき、その文献学的・言語学的検討を実施して、本文の翻字・かな書き朝鮮語のハングル表記の復元をおこない、データベースを構築する。具体的には、本書「朝鮮筆記」と対馬宗家文書との照合により本書の成立過程について検討する、かな書き朝鮮語語彙を解説する、その転写システムを解明する、その朝鮮語史上における位置づけについて検討する、等の作業を実施する。これらの検討・考察をおこなった後、本研究の結果を学会で発表し、この資料を、この分野にたずさわる研究者一般が利用できる形で、ひろく学界に提供する。

個人研究

プラトンの中期イデア論の生成

研究代表者・本学非常勤講師 西尾 浩二
(哲学・倫理学)

研究の全体構想は、『国家』を中心とするプラトンの中

期対話篇において、魂(心)に関する理論である「魂の三区分別説」、および知識(知る)と存在(ある)について説明するための形而上学的理論である「中期イデア論」が、それぞれいかなるものであり、なぜ要請されるにいたったのかを解明すること、そしてこれらを理論的支柱とする「中期プラトンの教育思想」——「教育とは《善》(善そのもの)への魂の向け変えである」(『国家』518D)という考えを核とする思想——に多角的に光を当て、それが含みもつ可能性を探り出すことである。これらのうちで「魂の三区分別説」の解明については、博士論文を含むこれまでの私の研究ですでに必要十分な程度に達成されたと考えている。したがって本研究の中心的課題は「中期イデア論」の解明である。

そのために本研究がとる手法は、プラトンの前期対話篇(ソクラテス的対話篇)にまでさかのぼって考察することであり、なぜイデア論が提起されなければならなかったのかを問い、中期イデア論生成の背景や要因あるいは動機を探ることである。そのさい前期対話篇のうちで(『ラケス』『メノン』等も参照しつつ)『エウテュプロン』をもっとも重視する。内容や用語の点で中期イデア論へ発展する方向性をかなり明瞭に示しているとみられるからである。

そこで、全体構想の中での本研究の具体的な目的は、次の三つから構成される。

(1)前期対話篇にみられるソクラテスの「何であるか」の問い(「勇気とは何であるか」など、一般には「定義の探求」と解される問い)から中期イデア論が生成するには、どのような背景や要因あるいは動機があるのかを明らかにすること。

(2)(1)の解明過程で前期対話篇のうちでもとくに「敬虔とは何であるか」を主題とする『エウテュプロン』に焦点を当て、探求における定義の優先性やイデア論との関連をはじめとしてさまざまな論点から総合的に研究を行い、解説・注解付き翻訳を作成し公刊すること。

(3)(1)(2)を踏まえて中期イデア論を捉えなおし、それにより中期プラトンの教育思想へ新たな光を当てること。

平成23年度はおもに(2)に力点を置いて研究を進め、関連文献の収集と調査を行うとともに『エウテュプロン』の翻訳にも着手した。平成24年度は昨年度の研究に基づき(2)を達成することをめざし、さらにそれと平行して(1)と(3)の解明を進め、研究成果をとりまとめて学術雑誌で公表することをめざす。

個人研究

本地物語の研究

—菩薩行と誓願を視座として—

研究代表者・本学非常勤講師 箕浦 尚美
(国文学)

室町時代を中心とした短編の物語群であるお伽草子のうち、「本地物」と呼ばれる作品群は、一般に、「(一)主人公は多く神仏の申し子であるというような異常な出自をもち、(二)いったんは流離・艱難のもとに沈淪するが、(三)神仏の加護によって救済されやがて神仏になる」(荒木繁『語り物と近世の劇文学』桜楓社、1993年、初出1959年)と定義される。本研究では、これらのうち、仏や菩薩の前生物語を研究対象とする。

その典型と言える作品には、『阿弥陀の本地』や『日月の本地』がある。前代からの説話では、『今昔物語集』巻5第22話などが同様の構造を持っており、かつて、これらは印度中国撰述経典を典拠とすると考えられていた。しかし、実際には、『大乘毘沙門功德経』や『観世音往生浄土本縁経』などの平安期に日本で撰述されたと考えられる偽経に拠っている(牧田諦亮・落合俊典、七寺古逸経典研究叢書四『中国日本撰述経典(其之四)・漢訳経典』、大東出版社、1999年)。言うまでもなく、仏の前世の物語はインド由来である(本生経、*jātaka*)が、お伽草子の本地物語により近い構造が、これらの日本撰述経典に現れるのである。その構造の特徴は、新出の説話集である金剛寺蔵(佚名孝養説話集)(13世紀頃写)にも見られる(本書については、科研費若手研究(B)「新出孝養説話集の研究」(課題番号19720051)において基礎的研究を行った)。所収説話には以下の特徴がある。

- ①初期仏教における本生経(*jātaka*)と同様の構成を持つ短編の物語である。
- ②しかし、本生経のような単純な転生の繰り返しではない。
- ③その内容は、主人公の苦難をテーマとして誓願を立てて(説話によっては捨身して)転生するものであり、
- ④『法華経』『金光明経』『悲華経』等の大乗仏典において菩薩の過酷な捨身の行為が強調される「長編の」過去の因縁物語(*pūrvayoga*)の影響が考えられる。
- ⑤物語は家族の関係が重視されている。

これらの特徴は、『大乘毘沙門功德経』や『観世音菩薩

往生浄土本縁経』にも共通し、jātakaとは区別されるべき本地物語の性格として捉えることができる。それは、当時の信仰の反映と捉えられ、具体的には、『法華経』『金光明経』などを通した利他行を重視する菩薩行と誓願観を踏まえていると考えられる。本研究の目的は、まず、その思想的背景を意識してこれらの物語を読み解くことである。また、平安期と室町期では、菩薩行の実践に対する意識には差があり、同じ論理では説明できない。その共通点と差異の分析によって、中世の本地物語の構造を解明したいと考えている。

個人研究

新出土仏教遺物と文献史料の統合による13～17世紀北アジア史の再構築

研究代表者・教授 松川 節
(東洋史学・人文情報学)

近年の歴史学的碑刻・文書調査と考古学的発掘調査により、13世紀～14世紀前半のモンゴル支配時代、そして14世紀後半～17世紀のポスト・モンゴル時代において、北アジアで独自の仏教文化が存在していたことが明らかになりつつあるが、それらの仏教文化に通時的な連続性・継承性があるか否かという問題はほとんど研究されず、看過されてきた。本研究は、モンゴル高原のオルホン河・トーラ河流域を調査対象域とし、新たに出土・発現した13世紀～17世紀までの仏教遺跡や文字資料が、従来の文献学的歴史研究といかに整合性を持つか、また統合可能かを明らかにしつつ、仏教をキーワードとして浮かび上がる北アジア史の新たな地平を追究すること、すなわち、新出土仏教遺物と文献史料の統合による13～17世紀北アジア史の再構築を目的とする。具体的には、以下の4つの研究基軸を設ける：

<13・14世紀カラコルムにおける仏教遺跡の調査・研究>

1. 新たに発掘された興元閣址から出土した遺物を考古学的、歴史学的、保存科学的な各側面から調査・研究し、その来歴及び年代を比定するためのデータを抽出する。
2. 同様に、仏教学・仏教美術史の専門研究者が、チベット仏教的、ウイグル仏教的、西夏仏教的、契丹及び中国仏教的な側面から比較研究を行い、カラコルムにおける

モンゴル仏教の諸要素を抽出する。

3. 13・14世紀モンゴル仏教に関わる文献記述を博捜し、その中でカラコルムに関わるものをデータベース化し、出土遺物と照合する。

<15～17世紀カラコルム廃墟とエルデニゾー寺院との関連についての調査・研究>

1. 現存するエルデニゾー寺院の諸堂宇・外壁について、考古学的、寺院建築学的、保存科学的な調査を行い、堂宇の基礎部分がモンゴル帝国時代に建造されていた可能性を検証する。

2. エルデニゾー博物館及びエルデニゾー寺院に所蔵される古文書の書誌情報データベースを作成し、エルデニゾー寺志に関する文字資料を学界に公表する。あわせて、モンゴル国最大の仏教寺院ガンダン寺図書館及びモンゴル国立図書館に所蔵される資料についても基礎的な研究を行い、関連資料を抽出する。

<出土遺物と文献史料との整合性の研究>

1. 13～20世紀までのモンゴル仏教史に関わる文献史料のうち、モンゴル文、チベット文、漢文について、出土遺物によってもたらされた新たな史実と文献史料との整合性を検討する。

<北アジア仏教史>

1. 以上の研究を通して拓かれる新たな北アジア仏教史を記述し、国際シンポジウムを開催して討議・検討し、評価を受ける。

個人研究

作家疑遅文学からみる「満洲国」時代の中国文人の心象風景に関する研究

研究代表者・教授 李 青
(中国現代文学・中国語)

本研究は満洲国時代に活躍していた中国人文芸グループ「芸文志派」に所属する作家疑遅に焦点を当て、彼が執筆した小説と編輯していた雑誌を中心に分析を加えようとするものである。疑遅をはじめとする中国人作家たちの「満洲国」内における文芸活動を通じて、「満洲国」の実態に文学の視覚から迫り、中国文人の心象風景を解明していきたい。

これまで、疑遅に関する論考はすでに一定の研究成果

を上げ、多数の論本を執筆した。疑滞文学を「満洲国」で発生した創作文学として、中国現代文学史の大きな枠組みの中で、どのように位置づけるべきか、また彼をはじめとする中国人作家たちはどのような心境のもとで、文学活動をなしてきたかを明らかにしようとしてきた。疑滞はロシア文化の薫陶によって育てられ、文学創作を志すようになった。「満洲国」時代に精力的に数多くの文学を創作し、文芸雑誌の運営、編集にも携わってきた。その特異性のある文学作品は、日本サイドで所謂一般的な「満洲文学」というジャンルから単純に評価を下してしまってもよいものなのかという疑問が生じた。そこで、再度、資料収集と関係者へのインタビューを実施した上で、疑滞文学を講読すれば、疑滞文学の再認識と再評価が可能になると予測される。為政者の意図とは別に、「満洲国」全体で、どのような文学が創造され、文化的特徴を顕現したかを明らかにしうる端緒になる手法でもある。

東北三省の図書館と中国国家図書館・上海図書館で資料調査を実施するとともに、現地で親戚や知人に対するインタビュー調査を行い、疑滞に関する未発見資料を収集する。こうすれば疑滞文学の実像に迫り、新しい文学史観の開拓が得られると考えている。

具体的に以下のように研究を進めていく。

まずは、疑滞に関する資料収集に力を入れたい。国内外の図書館を中心に収集作業を進めていきたい。

1. 日本の研究機関で可能な限り資料を閲覧、複写する。入手した資料を分析・整理する。
2. 長期休暇を利用して、中国へ渡航し、現地調査を実施する予定である。まず中国の東北三省を中心に資料を収集し、調査を行う計画である。疑滞文化の原点であるハルピンから研究調査を始める。ハルピンにある研究機関に向き、関連資料を収集する。
3. 北京にある国家図書館でマイクロフィルムや関連作品の閲覧などを実施する。なお、必要に応じて、社会科学院や北京の大学などの研究施設でも関連資料の収集を行う。
4. 上海図書館本館及び徐家匯分館にも「満洲国」時代の資料が点在しているので、それらを入手できるように収集したいと考えている。

入手した資料を資料集として、できるだけ多くの研究者の一助とできるよう、公開の準備をするとともに、研究成果を日本の「満洲国」研究会や関連学会で発表する。研究の成果を活字にできるよう、論文を刊行する。

個人研究

日本中世における治水・利水に関する史料的研究

研究代表者・任期制講師 川端 泰幸
(日本中世史学)

農業を基本的生業とする前近代日本では、生産を安定的におこなうための治水・利水が不可欠の営みであった。用水確保や災害対策において、その技術や知恵が現代にまで活かされている場合も少なくない。

本研究では、開発の時代とも呼ばれる日本中世の治水・利水関係の文献・金石史料を網羅的に収集し、8世紀～16世紀後半の列島社会における治水・利水の特質と、治水・利水を媒介とする人びとの営為を明らかにすることを目的とする。

従来の日本における治水・利水史に関連する研究分野としては、荘園の現地調査が挙げられる。1970年代以降急速に進められた圃場整備事業などによる景観の喪失に対する危機感から歴史学界が取り組んだものであった。その過程では、古文書調査・聞き取りによる古地名の復原・民俗調査など、複合的な手法で調査が行われ、文献史料のみでは分からなかった具体像が明らかになってきた(海老澤英『荘園公領制と中世村落』2000年)。治水・利水についても、この荘園調査のなかで、用水慣行や水掛かりのあり方、水利組織の構造などが詳細に検討された(和歌山中世荘園調査会編『中世再現一二四〇年の荘園景観—南部荘に生きた人々—』2002年など)。

ただし、治水・利水は、荘園制研究という枠組みのなかに包括される一つの要素として、時間的にも空間的にも限定的な把握にとどまり、中世(時間)と列島社会(空間)という広がりにおいて、治水・利水の特質を総合的に把握しようとした研究は、寶月圭吾による専論(寶月圭吾『中世灌漑史の研究』1961年)以来、ほとんどなされていない。寶月の研究も、限られた史料状況の中でなされたものであり、現時点であらためて上述のテーマに取り組むことには、十分な意義があると思われる。

こうした現状を踏まえて、本研究では中世の史料集から網羅的に治水・利水に関わる史料を収集し、その特質を検討するとともに、現在まで遺されている治水・利水の故地を实地踏査し、日本史における治水・利水の変化過程を跡づけるとともに、新たな位置づけを試みたい。

個人研究

日本における子供向け シェイクスピア 翻案物の研究

研究代表者・講師 三浦 誉史加
(英文学・英米文化)

本研究は、明治期から現代にかけて、様々なメディアを通して日本で発信された子供向けシェイクスピア翻案物を分析し、少年少女を主な消費者層としたシェイクスピア表象の大きな枠組みの中で検証しながら、日本の子供教育においてシェイクスピアが持つ役割を明らかにする取り組みの一助とすることを目的とし、少年少女向け雑誌に掲載された翻案物に焦点を当てる。

イギリス・アメリカにおいては、2000年代に入り、子供向けシェイクスピア翻案物研究を体系化しようとする動きが活発に見られている。そこでは、舞台芸術であったシェイクスピアが、子供向けの読み物として再構築されていく一方で、学校教育においてパフォーマンスを伴うシェイクスピア体験が重要視する文化を保持発展しつつ、シェイクスピアとナショナリズムが結び付けられる時代を経て、多様なメディアを通してサブカルチャーや商業主義の狭間で揺れ動く様子が多角的に検証されている。

一方、日本におけるシェイクスピア受容研究では、明治期以降から現代に至るまでの翻案物について、層の厚い研究成果が発表されているが、研究対象とされてきたのは、主に成人読者・観客層をターゲットとする制作物である。子供向け翻案物の個々の作品研究において取り上げられるのは、ラム版の翻訳が多く、『少年の友』『少国民』『少女の友』といった雑誌を始めとした様々な媒体で扱われた翻案物が十分に研究されてきたとは言えない。

しかしながら、日本における子供向けに特化したシェイクスピア翻案物は、成人向けと連続性を持ちながらも、別個のカテゴリーで検証する必要があるだろう。日本最初の少年少女雑誌『ちゑのあけぼの』創刊や『赤い鳥』の発行が象徴するように、明治期以降の日本は、ルソーやロマン主義の影響を受けながら子供時代に固有の意味を見出すようになった。一方、日本における子供観は、日本の文化・社会的状況を背景としつつ、戦前・戦後と独

自の発展を遂げていった。ラム版移入が代表するように、イギリスの子供観を取り込みながら、同時にそれとは距離を持つ日本の子供観がシェイクスピア受容にどのように反映されているのかを考察し、日本における大人のシェイクスピア受容・英語圏における子供向けシェイクスピア翻案物と比較検証し、位置づけを図る必要がある。

そこで、本研究では、明治初期にその翻訳が紹介され、明治期の文学者にとって重要な役割を持ち、その後の子供向け翻案物に影響を与えたラム版の先行研究を押さえた上で、特に明治期から現代まで発行された少年少女向け雑誌に着目したい。読者層が特化され、編集方針が明確である雑誌において、同号内で取り上げられたシェイクスピア以外の読み物を参照することにより、その時代を読み解くことが可能だからである。明治・大正・昭和・平成に至るまで、日本の子供観の変遷につれ、少年少女を対象としたシェイクスピア表象がどのように変化してきたかということ明らかにすることが本研究の目的である。

海外学会参加報告

アメリカ宗教学会年次大会学会に参加して

「指定研究」国際仏教研究 研究代表者・准教授 井上 尚実

2011年11月19日(土)から22日(火)まで、米国カリフォルニア州サンフランシスコ市において、アメリカ宗教学会(American Academy of Religion, 以下AARと略す)の年次大会が開催された。AARはアメリカのみならず世界の宗教学の中心的学会であり、仏教・日本宗教の分野においても最も重要な国際学会として、その大会には第一線の学者・研究者の多くが集まる。真総研の国際仏教研究(英米班)からも、毎年少なくとも1名の研究員あるいは嘱託研究員を派遣するように努め、研究の発表・交流・動向の把握を行なっている。今年度のサンフランシスコ大会は、浄土真宗関係の特別パネルやミーティングが複数予定されていたため、英米班にとって特に重要な大会であった。そこで、研究員1名(筆者)に加え、嘱託研究員1名(マイケル・コンウェイ、本学非常勤講師)が参加して情報収集を行なった。4日間の会期中に仏教学・日本宗教史関係で約60のパネルという忙しいプログラムで、二人で手分けしても主要な発表をカバーすることが難しいほどであった。以下、聴講できたパネルの幾つかについて概要を報告する。

1) 浄土真宗関係の特別パネル(プログラムA20-257)

11月20日(日) 15:00-16:30

テーマ: Revisiting the Pure Land: New Research in Pure Land Buddhist Studies

「浄土再訪: 浄土教学・真宗学における新たな研究」

司会: スコット・ミッチェル (Institute of Buddhist Studies 仏教大学院)

パネリスト: マーク・ブラム (ニューヨーク州立大学、英米班嘱託研究員)

ケネス・タナカ (武蔵野大学)

那須英勝 (龍谷大学)

ジェシカ・メイン (プリティッシュ・コロンビア大学)

いずれも国際真宗学会 (IASBS) の要職にある研究者5名が組織したパネルで、それぞれの最新の研究が発表された。ブラム教授は、念仏に関する発表の後、刷り上がったばかりの近代教学アンソロジー英訳 *Cultivating Spirituality: A Modern Shin Buddhist Anthology* (SUNY,

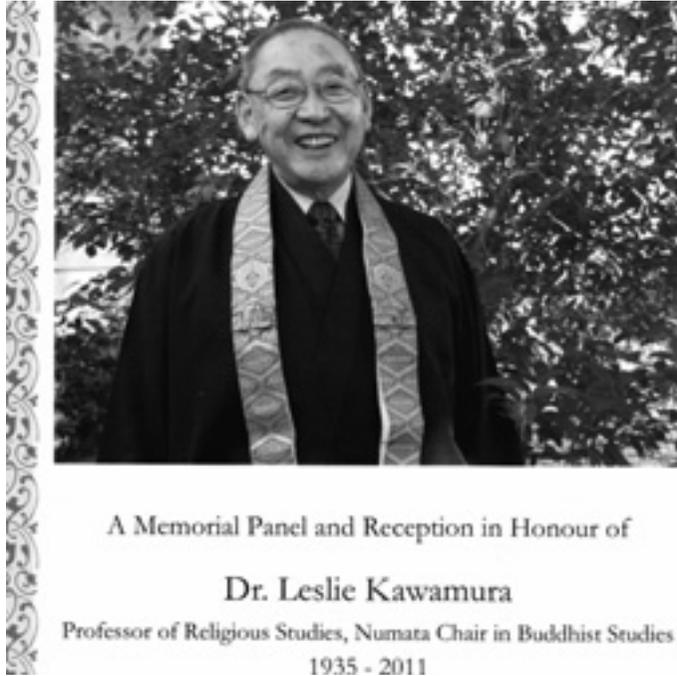
Nov. 2011) を聴衆に紹介して注目を集めた。会場には2009-2011年度の大学院特別セミナー客員教授のジェームズ・ドビンス教授(オーバーリン大学)やスタンフォード大学のポール・ハリソン教授など、真宗・浄土教研究の著名な研究者が集まり、活発な質疑応答があった。今回は Wildcard session (大会主催者の裁量による発表枠) に真宗関係のパネルが選ばれたが、Pure Land Studies Group 「浄土教部会」として継続的発表枠を認めるようAARに申請していた。しかし、残念なことに今回は承認されなかった。AARにおける仏教学や日本宗教関係のグループ(承認された部会)の存在は相対的に大きくなってきているが、全体の発表枠は限られており、新たにグループとして独立するのは難しいようである。

2) レスリー・カワムラ教授追悼パネルとレセプション(プログラムM21-400)

11月21日(月) 19:00-23:00

長年に渡り国際的な仏教学(唯識学)・真宗学をリードされ、2011年の春、在職のまま亡くなられたカルガリー大学のレスリー・カワムラ教授(1935-2011)を追悼する記念パネルとレセプションが、カルガリー大学宗教学部・AAR Yogācāra Studies Group 「瑜伽行・唯識部会」・国際真宗学会の共催で開催された。このパネルとレセプションにも多くの国際的な仏教学者・真宗関係の学者が集まり、カワムラ先生の思い出を語り、遺徳を偲んだ。

国際研(英米班)は、2007年にカルガリー大学で開かれた国際真宗学会大会にパネルを組織して参加したが、その折、カワムラ先生には大変お世話になった。当時72才の現役教授は、ホテルと大学を往復する送迎車のハンドルを自ら握り、微笑みを絶やすことなく、大会運営全般に心配りされていた。その快活なお姿は、北米の仏教文献学をリードした高名な学者というよりも「還相の菩薩」あるいは「妙好人」という印象で、本当に頭が下がった。合掌。



上記に加えて、以下の発表が特に興味深かった。

- 3) 世親の『唯識二十頌』に関するパネル (A19-235)
Analyzing Vasubandhu's Twenty Verses (Vimśatikā) : Causes, Objects, Appearances, Aspects
(一昨年公開講演をお願いしたミドルベリー大学のウィリアム・ウォルドロン教授が発表)
- 4) 文化人類学・民族学的アプローチによる仏教研究に関するパネル (A20-310)
State-of-the-Field Roundtable: Ethnographic Approaches to Buddhism
(本学に留学して浄土真宗の坊守をテーマとした博士論文に取り組んだヴァージニア大学のジェシカ・スターリングさんが発表)
- 5) 大衆文化に浸透した日本宗教に関するパネル (A20-272)
Recontextualizing Japanese Religions in Popular Cultures
(本学大学院出身でカリフォルニア大学において学位を取得し、アラスカ大学にポジションを獲得

した阿満道尋博士が「志賀直哉と仏教」について発表)

- 6) ハワイ大学出版から2011年に出たばかりの『日本哲学資料集』に関するパネル (A21-322)
Critical Reflections on Japanese Philosophy : A Sourcebook
(編者であるジェームズ・ハイチク教授、トマス・カスーリス教授、ジョン・マラルド教授が発表。ロバート・ベラ教授、マーク・ウンノ教授が応答)

以上の例にみられるように充実した今回の大会であったが、真宗学で学位を取得したばかりのマイケル・コンウェイ嘱託研究員が参加し、世界の仏教研究・真宗研究の最先端に触れ、研究者としてのネットワークを広げられたことは、国際仏教研究(英米班)の活動にとって有意義であった。次回2012年度AARはシカゴで開催される予定で、研究員の派遣を予定している。

海外研究調査報告

アメリカの公共図書館における専門職制度の総合的研究： ケンタッキー州における専門職と非専門職の枠組み

一般研究（山本班）研究代表者・教授 山本 貴子

我が国の公共図書館界では、専門職と考えられる職務と一般的な職務とを併せたものが司書の職務として認識されており、司書の職務における専門職の枠組みが不明確である。一方、アメリカでは、図書館の職員が、その職務の内容から、ライブラリアンと図書館サポートスタッフという名称で専門職と非専門職に区別されており、社会的にも両方の存在が認知されている。さらに、ライブラリアンのみならず、図書館サポートスタッフの養成教育も約40年の歴史を持つ。これは、職種と職階と資格とが結び付けられた結果であろう。

このテーマについては、既に、漢那憲治氏（龍谷大学教授）、大城善盛氏（花園大学非常勤講師）、瀬戸口誠氏（梅花女子大学講師）、中島幸子氏（梅花女子大学特任教授）と共同研究し、「ALAの図書館情報学教育認定基準2008年版に関する考察—1992年版の改定と課題を中心に—」、「アメリカにおける図書館職員の要件と資格」など、4本の論文を執筆した。しかしながら、現在の研究は文献調査のみであり、実態の把握がまだ十分になされていない。そこで、本研究では、アメリカの公共図書館におけるライブラリアン及び図書館サポートスタッフの職階・職務及び資格と養成法の実態を調査した。

まず、本研究チームのホームページを作成し調査対象機関に連絡を取り、予め電子メールで聞き取り調査を行った後、訪問調査を行った。内容としては、アメリカの公共図書館界における専門職（ライブラリアン）及び非専門職（図書館サポートスタッフ）の職務とその養成であり、そのシステムのメリットや課題について明らかにした。

本研究では、ケンタッキー州を対象とした。ケンタッキー州には州法と「ケンタッキー公共図書館基準」があり、奉仕対象の規模による職員の人数や職員の資格まで詳細に規定されているからである。調査対象機関については、州立図書館、規模の異なる市立図書館、専門職・非専

門職の養成機関、すなわち、ケンタッキー州立図書館、レキシントン公共図書館、ポール・ソイヤール公共図書館、ケンタッキー大学および大学図書館、ブルークラス短期大学および短期大学図書館、北ケンタッキー大学および大学図書館を取り上げ、2011年9月4日から14日まで調査を行った。調査内容としては、図書館に対しては、現場の職員の職務内容と必要とされる要件など、大学などの教育機関に対しては、カリキュラム、取得できる学位・資格などである。

その後、調査結果の分析と、現地調査の際、会議の内容をICレコーダで記録した内容とを含めて、2012年1月に中間報告としての論文を作成した。

また、本研究に共同研究者として参加された漢那憲治氏、大城善盛氏、日沖和子氏（ケンタッキー大学図書館）らを招き、2011年11月19日、12月10日、2012年1月13日に公開研究会を開催してその成果を発表した。

3月に、本研究も含めた一連の論文について論文集を発行し、最後に、3月14日から15日にかけて、漢那憲治氏、大城善盛氏、瀬戸口誠氏、中島幸子氏と、湖西キャンパスで本研究の総括と今後の計画策定とを行った。

Libraries & Archives Monthly

News from the Kentucky Department
for Libraries and Archives

October 2011

In This Issue

Kentucky Book Fair to Host
Children's Day
Kentucky Public Library
Standards Available
Director Believes in the
Power of Literacy
Madison County Public
Library Welcomes New
Director
Trustee Connection
KDLA Celebrates National Library
Certification Holders
KDLA Welcomes New
Trustees
Kentucky Libraries
Entertain Japanese Visitors
Boyd County Public Library
Celebrates National Library
Card Sign-Up Month with
READ Posters
Library Director Nellie
Jordan...a Profile in

Kentucky Libraries Entertain Japanese Visitors

By Michael Jones
Library Branch Manager
Kentucky Department for Libraries and Archives

Kentucky libraries were
the focus of three
visitors from Japan
recently. The visitors
were retired and current
Library Science
professors interested in
seeing how libraries
operate in this country.
Zensei Oshiro from
Hanazono University,
Keiji Kanna from
Ryukoku University, and
Takako Yamamoto from
Otani University arrived on



Wayne Onkst, Michael
Jones and Charlene Davis
with visitors

ケンタッキー州立図書館ニュースレターに掲載

国内学会参加報告

第10回東アジア仏教研究会年次大会に参加して

一般研究（大内班）協同研究員・本学非常勤講師 戸次 顕彰

2011年度一般研究（大内班）は「道宣著作の研究」を研究課題とし、研究代表者の大内文雄教授を中心に仏教史学・東洋史学・仏教学の教員・院生で構成される。道宣は中国初唐を代表する仏教者の一人でありながら、著作の内容解明に関しては『四分律行事鈔』など一部の著作の部分的研究にとどまっており、これまで道宣の著述活動の全体像を把握しようとする総合的な研究がなされてこなかった。本研究班では道宣著作の序文の読解作業を通して、各著作の性格やそれぞれの連関関係を明確にしていくことを目的としている。

しかしながら道宣の著述活動は戒律・史伝・護教・経録などの多岐にわたり、また中国古典やインド伝来の経律論の語法を縦横に用いた博識かつ難解な文体で知られる。したがって本研究を遂行するためには、学際的に視野を広げつつ、研究員各自が他分野の研究成果を多く吸収する必要に迫られる。よってこの研究班では、他大学・他機関で開催される学会への参加や研究交流を活動の一環として位置付けているのである。

そこで筆者は2011年12月3日(土)に駒澤大学で開催された第10回東アジア仏教研究会年次大会に参加した。この研究会は「東アジア」という名称が象徴するように、漢字文化圏である中国・朝鮮・日本仏教の研究者が会員に多い研究会である。筆者も以前2010年7月の第18回定例研究会（東洋大学）で研究発表を行い、『東アジア仏教研究』第9号（2011）での掲載（題目：「道宣による『七種礼法』引用の意図—仏道における罪と福—」）の機会に恵まれた経緯があり、今回は大内班の研究活動の一環として研究交流を目的に参加してきた。

この研究会は2011年で発足10周年となるが、その前身は「中国仏教研究会」といい、1978年から東京大学などを中心に『摩訶止観』の講読などを行ってきたという。その成果は多岐にわたるが、中でも『『摩訶止観』引用典拠総覧』（中山書房仏書林、1987）の刊行などは電子テキストが普及している今日においても重要な参考書となっている。その後1983年、木村清孝氏が東京大学助教授に着任されると、氏を中心に若手研究者の研究発表の場として活動を展開させ、さらに2001年3月、木村氏が東京大学を定年退官される時に「東アジア仏教研究会」と改称し、菅野博史氏（創価大学教授）を代表世話人として現在に至っている。主な活動は大正大学・東洋大

学・駒澤大学を会場として毎年5月・7月に定例研究会、12月に年次大会が開催されている。また毎年5月には学会誌『東アジア仏教研究』が刊行されており、2011年の時点で第9号まで発刊されている。

研究会での発表時間は30分、さらに討論時間を30分とし、また充実した討論のため発表者の発表原稿は一週間前に会員全員にメールで配信される。一般の学会に比べて発表者の持ち時間の長さ、充実した質疑に配慮がなされている点に特徴がある。ここでの研究発表は私のような初学にとって厳しいものではあったが、他機関の先生方から多くの教示を受けることができ、また論文掲載の審査に際しては2名の匿名の査読者からの厳密な査読を受けることができるなど、極めて有益な研究会であった。

さて、筆者が今回参加した第10回年次大会の発表者・発表題目・コメントーターを以下に記す。

- 菅野博史（創価大学教授）
「『大乘四論玄義記』仏性義の構成とその思想について」
コメントーター：吉村誠（駒澤大学准教授）
- 寺尾英智（立正大学教授）
「日蓮の法難をめぐる認識と伝記」
コメントーター：前川健一（公益財団法人東洋哲学研究所研究員）
- 崔恩英（Choi EunYoung）（韓国金剛大学校 仏教文化研究所HK教授）
「真諦の金剛経註釈書とその周辺」
コメントーター：佐藤厚（東洋大学非常勤講師）
- 張文良（Zhang Wenliang）（中国人民大学准教授）
「靈弁『華嚴経論』の戒律思想」
コメントーター：袁輪頭量（東京大学大学院教授）

本研究会の会長でもある菅野氏の発表は、慧均の『大乘四論玄義記』「仏性義」の「第一大意」を取り上げ、紹介・考察したものである。寺尾氏の発表は「四大法難」と呼ばれる日蓮の四度の受難を取り上げ、これをめぐって後世に異説が提示されたことなどを踏まえて再検討を行ったものである。崔氏はインドの初期の瑜伽行唯識学派の論師たちの『金剛経』註釈書と真諦三蔵の註釈

との関係を考察したものである。また真諦の註釈と吉藏との関係にも言及している。最後に張氏の発表では、すでに注目されている北朝仏教の大乗戒重視の風潮を踏まえて、靈弁の『華嚴經論』にもその姿勢が見られることを論じて彼の戒律思想の特徴を考察したものである。

上記発表の中には道宣の前代の思想動向を考えていく上で重要な指摘もあった。特に張文良氏が地論宗・華嚴宗を北魏時代の戒律重視の学風との関係で注目していたことは重要な視点であり、道宣の実践道が形成された背景とも無関係ではないと思われる。なぜなら北朝の律学興起を考察するには北魏の慧光の存在を無視できず、律宗と地論宗はこの慧光から展開しているからである。さ

らに地論宗はやがて華嚴宗に発展解消されると言われるが、華嚴宗の智儼と律宗道宣は終南山という同地域ではほぼ同時代に活躍しているのである。よって道宣研究における今後の課題としては、このような他学派の教理・実践との連続性にも注意する必要があると思われる。

2011年度に大内班で行った「道宣著作の研究」は、このような学会参加を含めた学内外との学術交流も重要な要素であるといえる。その点において今回の年次大会に参加できたことは誠に有益であった。また会場校であった駒澤大学は大学駅伝の有力校でもあることから、一ヵ月後に迫る箱根駅伝での必勝ムードが学内に漂う中での開催となったことが印象的だった。

国内研究調査報告

福岡市立四箇田小学校・富山市立堀川小学校の調査について

一般研究（高山班） 研究代表者・教授 高山 芳治

国内研究調査の概要

一般研究高山班では、現在特色ある授業・教育活動を行なっている学校・教師の授業実践・学級経営の実際を参観することを研究計画に組み込んでいた。

今回、2月15日から17日までの3日間、「福岡ひとり学習の会」の古賀一夫教諭が担任をしている福岡市立四箇田小学校、2月27日から28日の2日間、富山市立堀川小学校をそれぞれ訪問参観した。

以下は、各小学校参観の記録である。四箇田小学校の報告は研究員の関口敏美が、堀川小学校は山内清郎がそれぞれ担当した。

福岡市立四箇田小学校参観の記録

2月15日から17日までの3日間、「福岡ひとり学習の会」の古賀先生の担任する5年1組にて、朝の会から終わりの会まで、古賀先生の授業と学級経営を参観した。

5年1組には、通常の一斉授業の形態なら学級崩壊の引き金になりそうな男児が5～6名いたが、「ひとり学習」のおかげか、学級崩壊には至っていなかった。彼らがふざけている間も他の児童たちは自分の学習を進めており、その間、古賀先生が個別指導の必要な男児の間を巡回していた。

子どもたちはあらかじめ配布されている「勉強ニュース」をもとに学習を進めるのだが、そこには、どの教科も各時間ごとに学習のめあてがわかりやすく示してある。一斉授業と班活動・個別学習の組合せで、各自が自分の学ぶペースで学習を進めていくのである。

5年生は、算数が習熟度別編成であるが、古賀先生の担当するクラスでは、算数にも「ひとり学習」の方法をとりいれている。四箇田小学校において古賀先生の学級以外では、「ひとり学習」を実践しているところはないが、この方法は、個別学級単位での取組が可能である。

5年1組は、古賀先生が四箇田小学校に赴任した最初のクラスなので、児童も「ひとり学習」のやり方がようやくわかってきた段階とのことであったが、感想を聞いてみると、「ひとり学習」が好きだと答える児童もいた。

児童が「ひとり学習」の方法を習得すれば、自分で学習のめあてを設定できるようになり、また、ふり返りの

レポートによって探求的学習も可能になる、とのことである。5年1組の児童のうち来年も古賀先生が担任する子どもたちは、「ひとり学習」の方法をさらに深める機会があると考えられるので、継続的な観察を行う必要がある。



於：福岡市立四箇田小学校

富山市立堀川小学校参観の記録

2月27日から28日の2日間、富山市立堀川小学校の授業を参観した。今回の訪問参観はいずれのメンバーにとっても2回目、もしくは3回目の訪問であったため、メンバーの各人がそれぞれのテーマに焦点を絞り参観にのぞむことができた。

今回の参観で特に印象深かったのは、4年生の算数科（総合）の授業であった。以前の訪問参観時にも、堀川小学校の特徴である「くらしのたしかめ」的スタイル・手法——子ども同士相互の意見の聞き合い・確かめ合い——を活かしての授業は、国語や社会の授業、あるいは道徳の授業等ではうまくフィットする点が多いだろうが、いわゆる理系的な授業、特に算数の授業ではどのように行われているのだろう、という点が共同研究のメンバー間でも疑問・さらなる関心としてあがっていた。今回の参観はその疑問に一定の答えを与えてくれるものだった。

「くらしの中の小数と分数」と題された単元で、子どもたちは、例えば「0.5」と「 $\frac{1}{2}$ 」の（表記の）違いは

何かということに関して、各自が自分の仮説を立ててのぞんでいた。計量カップや計量スプーンの実物、文房具等に書かれている数字表記を写真等で示すことで自らの仮説を他の子どもに示す子ども、あるいは、分数と小数の歴史を調べてきて披露する子ども、あるいはまた、自らの日常経験から考えて「ケーキの1/8個」とは言っても「ケーキの0.125個」とは言わないだろう、だから分数と小数の違いはここから考えられるのではないかという意見を発表する子ども。それぞれの仮説に他の子どもたちが真剣に耳を傾け、また詳しく確かめている様子。算数とくらしが結びつくのはこういう授業においてか、とはっと気づかされる思いがした。

と同時に、これはやはりあくまで総合的な学習の時間を活かしての授業であることも事実であった。いわゆる基礎基本となるような事項（この授業では、分数や小数の概念、その計算等）に堀川小学校としては、その特色

をどう展開しているのか。次回以降の訪問参観で、アプローチしていきたい点が浮き彫りとなる今回の参観であった。



於：富山市立堀川小学校

清沢満之・佐々木月樵両学長訓辞について

「建学の精神」教育推進研究 研究員・講師 西本 祐攝

本研究班では、「建学の精神」の具現化を課題とし、これについて具体的には以下の3つの視点から研究を進めてきた。

- ① 「建学の精神」の現代的表現化
- ② 「人間学Ⅰ」の共通資料集の作成
- ③ 「建学の精神」を活かした学科教育の在り方

ここに言う「建学の精神」とは、直接には大谷大学初代学長清沢満之による「開校の辞」（明治34年、移転開校式）と、第3代学長佐々木月樵による「大谷大学樹立の精神」（大正14年入学者宣誓式訓辞）を指す。

研究の視点①では、本学が今日まで教育の根幹に据えてきた両学長の訓辞の意義を再確認し、これを現代的形で表現していくことを目指している。両訓辞は、それぞれ「私立学校令（明治32年公布）」と「大学令（大正7年公布）」における宗教教育に対する厳しい制約のもとで公開されたものである。2011年度は、当時の歴史的状況を加味したうえで両訓辞の持つ意義を再検証するための研究を重ねたが、今後はその成果を踏まえ、両精神が

持つ現代的意義の確認と表現を含めた具現化の問題について、検討していくことが必要となる。

視点②では、本学の「建学の精神」に基づく教育を最も体現する科目である「人間学Ⅰ（文学部）」あるいは「仏教と人間Ⅰ（短期大学部）」に関して、教育の基礎となる共通資料の作成に向けた検討を進める。現在同科目は、主に真宗学または仏教学を専門とする専任の教員によって、「仏教と現代」（短期大学部では「仏教と人間の科目名）」という共通テーマのもとで行われている。しかし、授業内容や到達目標などに関しては統一がとれておらず、大学共通科目としての教育の質は、担当教員の工夫と裁量に依存した形で行われている。ここでは、これまでの「人間学Ⅰ」教育の歴史を十分に踏まえたうえで、いかにして「建学の精神」を体現する科目として、教育内容を共通化できるかを、検討していくことが期待されている。

視点③では、以上の①および②での成果を踏まえ、大谷大学の「建学の精神」と各学科における教育との連関

について検討作業を行うことを目指す。

以上の内容を、3ヵ年の期間で検討していくこととなるが、本年度は、主に視点①について、どのような経緯で両学長の訓辞が「建学の精神」として教育の根幹に据えられてきたのか、そこにはどのような願いがあるのか等に関する研究会を重ねた。現在、「建学の精神」を共有する意図をもって、毎年度、全教職員と全学生に配布される『学生手帳』に、両学長の訓辞が併記されている。従来、『学生手帳』には佐々木月樵の「大谷大学樹立の精神」のみが掲載されていたが、松原祐善氏が学長在職中（1974年～1980年）に、清沢満之の「開校の辞」を併記するようになった。『学生手帳』の編集には、学生部長がその責を持つこともあり、当時、学生部長の職にあった寺川俊昭名誉教授（元学長）に、いつ、どのような理由から両訓辞を「建学の精神」を象徴するものとして定めたのか、その経緯についてお話をうかがう機会を頂戴した。以下、その内容を簡潔に報告する。

2011年11月16、17日に、本研究班チーフの木越康と研究員の西本祐攝の2名が、広島県庄原市の西願寺（寺川俊昭名誉教授ご自坊）を訪問した。寺川名誉教授は、当時のことを振り返り、次のようにお話をくださった。

「当時の学長、松原祐善先生は、佐々木月樵氏のことをたいへん尊敬されていた。「大谷大学樹立の精神」は立派な内容をもっているとも考えておられた。しかし、大谷大学の理念となると、佐々木月樵の「大谷大学樹立の精神」では文化主義の香りが強く、むしろ、清沢満之が「開校の辞」に表明した純潔な宗教的精神こそ、建学の精神とすべきであるとのお考えをお持ちであった。清沢は、真宗大谷派教団の近代的改革に決定的な影響

を与えた人物であるとともに、教学の面においても、それまでの伝統を踏まえた上で、しかし近代という新たな時代を迎えていく中で大きな転換点となった人物である。そこで、仏教・真宗を公開する大谷大学としても、その清沢の精神を建学の精神として掲げるべきであろうという確めがなされた。そのような松原学長の提案をもとに、議論が重ねられ、多くの賛同を得て、清沢による「開校の辞」を「建学の精神」に加えて、教育・研究を行う方針を明確に打ち出すこととなった」と。

佐々木月樵の「大谷大学樹立の精神」のベースに清沢満之の「開校の辞」があることは従来より承知されていたが、真宗大学「開校の辞」が、大谷大学の建学の精神に据えられていく経緯を、以上のような聞き取りの中で確かめることができた。今後は、両訓辞に象徴される精神に基づく教育・研究とはどのような内実を持つのか、当時の時代状況を踏まえながら読み解いたうえで、今の大谷大学に具現化する方途を確かめていく。



「建学の精神」についてお話される寺川俊昭名誉教授（左）

研究成果報告

中国社会科学院歴史研究所との学术交流協定に基づく共同研究、及び公開研究会開催について

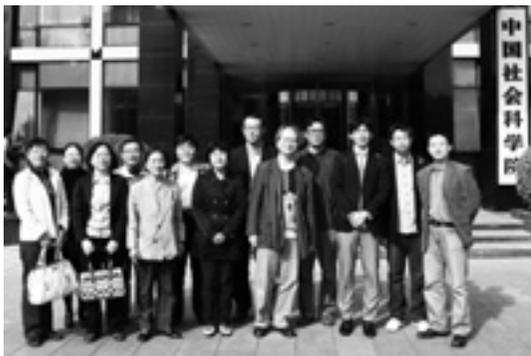
国際仏教研究（東アジア班） 研究員・准教授 松浦 典弘

本学真宗総合研究所と中国社会科学院歴史研究所との学术交流協定も2年目に入った。本年度は双方が相互に訪問し、共同研究及び公開研究会を行うことで、より充実した内容の交流となった。

本学からは、浅見直一郎教授と福島重任期制助教が、10月13日～17日の日程で中国社会科学院を訪問し、共同研究を行った。

13日は到着後、先方の国際交流事務責任者でもある楼勁科研處處長と会談した。楼先生によれば、これまでの交流の内容に関しては非常に満足しているとのことであり、今後より交流を双方にとってより充実したものとしていくため意見交換を行った。この他、13日夜には卜憲群歴史研究所所長主催の会食に出席、14日午後には、中外関係研究室の研究員の方々、雷聞副研究員、博明妹氏とそれぞれ会談し、親交を深めた。

公開研究会は、14日午前9時30分より歴史研究所1220会議室で開催され、先方からは隋唐五代遼金元史研究室所属の研究員が出席した。福島助教は「宋元時代の河南仏教—嵩山少林寺を中心にして—」、浅見教授は「3～8世紀における日中の葬制比較—日本の古墳を中心として—」と題して発表し、その後質疑応答が行われた。共に中国人研究者にはあまり馴染みのない「中国中近世における日中間の関係」を主題として挙げたので、参加した中国社会科学院の研究者のなかでも活発な意見が交わされた。



於：中国社会科学院歴史研究所

このほか、15日には劉暎研究員に同行していただき、北京市西南郊外の房山雲居寺を訪れ、現在は地宮内に保存されている石経や境内の石刻などについて詳細に調査した。また、16日には首都博物館において、北京近郊の文化財を展示する常設展示のほか、明の十三陵に関する特別展示を参観した。

一方、中国社会科学院歴史研究所からは、12月4日～10日の日程で、楼勁科研處處長・張彤『中国史研究』編集部主任・劉暎研究員・張国旺副研究員の4名を招聘し、共同研究を行った。

公開研究会は12月8日(木)午後2時40分から、響流館3階のマルチメディア演習室で行われた。張国旺先生が「近年新たに刊行された河北の元代仏教碑刻とそれに関する問題」、劉暎先生が「元代『大開元一宗』補論」、張彤先生が「中国大陸の史学雑誌の発展状況」、楼勁先生が「近年の中国古代史新資料の発見とそれに関する問題」と題して、それぞれ発表された。各発表とも最新の成果を踏まえられており、中国における研究の進展や学界の現状などがよく分かり、われわれ日本の研究者にとって大変有意義な内容であった。

研究会終了後は、会場を学内ビッグバレーに移して懇談会が開催された。引き続き、意見交換がなされると共に、和やかな雰囲気のもと、楽しいひと時が過ぎていった。

今回の訪問期間中、先生方は6日に学長室を訪問され草野顕之学長らと会談、夜は本研究所主催の歓迎会が開催され、藤嶽明信所長はじめ研究所関係者との交流を深められた。また、本学での研究活動の合間には、京都大学や龍谷大学を訪れられ、資料調査や研究者間の交流に務められたほか、銀閣寺・清水寺などを訪れられた。さらに東大寺など奈良においても仏教史蹟調査をされた。

相互の訪問の中で、今後の方針なども話し合われ、より組織的に交流を進め、将来的に共同で学会を開催する方向で合意を得た。共同研究活動をいよいよ本格化させていく上で実りの多い一年であった。



中国社会科学院招聘研究者 学長表敬訪問 於：学長室
後列 張国旺先生・(松浦)・劉曉先生・(浅見)・(主事)・(桂華)・(王)
前列 (所長)・(学長) 楼勁先生・張彤先生

研究協力校（京都市立金閣小学校・紫明小学校・ 第三錦林小学校）との授業研究並びに共同出版について

一般研究（高山班）研究代表者・教授 高山 芳治

◇研究の目的

学校教育において、どのように日々の授業を構築し展開をするのか、は永遠の課題である。2011年4月から、小学校では2008年版学習指導要領による授業が開始された。従来の学習指導要領と何がどのように変わったのか、授業をどのように展開すればよいのかといったことは小学校教育を論じる上で重要な研究課題である。そのため、小学校との連携の下に授業研究を行い、具体的に検証することが求められている。本年度、京都市立金閣小学校、紫明小学校、第三錦林小学校と連携し、社会科、道徳、音楽科、国語科に焦点を絞って共同研究を実施した。

◇小学校との連携による授業研究

2008年版小学校学習指導要領では、確かな学力を育成

すること、そのために、基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させること、これらを活用して課題解決のために必要な思考力、判断力、表現力などを育むことが重要であるとされている。また、その基盤となるのは言語に関する能力であり、その能力は国語科のみならず各教科等においても育成が強調されている。それ故、言語力を育成するために、どのように授業を構築するのが課題となる。

(1)金閣小学校との共同研究

上記の課題をふまえた社会科の授業展開はいかにあるべきかを、数度の研究授業を行い検証した。

授業構築のポイントを以下の点においた。

- ①子どもの学習への意欲化を図るために、地域の特性を生かした身近な教材の発掘、開発を行う。

②具体的体験を生かし、追究する活動の中に自らの考え、判断を表現する活動を重視する。

③授業全体を通して、多様な表現活動を工夫し、子どものプレゼンテーション能力を高める。

次に授業実践の一例を示す。

4年単元名「安全なくらしを守る 火事をふせぐ」

の授業研究を行った。授業は、火災から地域の人々の安全を守る活動について、消防署や関係機関の働きとそこに従事している人々や地域の人々の工夫・努力を考えるものである。

地域の安全を守るための消防団の働きについて、具体的に地域の消防団の活動に焦点を当てた授業が行われた。授業場面では、地域の地図をもとに、消防車がどのくらいの時間で到着するのかを考え、消防分団員へのインタビューなども取り入れながら進められた。授業を通して明らかになったことは、新聞記事などの具体的な情報をどのように授業に生かせばよいか、地域教材をより効果的に授業に生かすにはどうすべきか、子どもの考えをどのように表現をさせて追究活動を深めたらよいかなどである。

これらの授業研究の成果を研究冊子にまとめ、1月に行われた京都市の研究発表会において、研究授業とともに授業実践について発表を行った。

(2)紫明小学校との共同研究

言葉の交流を大切にされた道徳の時間を構築することは、子どもたちの自己理解・他者理解・人間理解を深めることにつながる。これを仮説として、どのように授業を工夫すればよいのかという観点から授業研究を行った。学生にも授業が公開され、理論に裏付けられた授業、授業実践からわかる授業理論と実践のずれなどが明らかにされた。

大学で究めようとする授業理念を、学習指導要領の改

訂と、時代の変化に対応する授業実践とのかかわりの中で確立し、普遍化して行くことは難しい。特に今日、道徳的实践を進めていくためには、家庭や地域社会との連携が必要であり、その具体化は学校現場で実際の授業を通じた実践研究を進めることによって確かなものになっていくと考えられる。

(3)第三錦林小学校との共同研究

第三錦林小学校との共同研究において、言語活動を重視した授業の充実をどのように図ることが、子どもたちの基礎的・基本的な知識の習得や思考力・判断力・表現力の育成につながるのかという点に焦点を当て研究を進めた。

まず、国語科の能力を調和的に育て、実生活に生きて働く力の育成を目指すための「言語能力育成プラン」を活用し、各教科における「言語能力育成プラン」を作成した。そして、言語の力を高めるために各教科に共通して行える指導法の開発とその系統化を進めるとともに、教科の特性を生かした言語の力を高める指導法について検証を進めた。コミュニケーションのための言語活動と一時間の学びで獲得したことを知識として定着させるための言語活動を適切に授業に組み込むことにより、思考・判断しながら主体的に学習に取り組む個々の児童の姿勢が育ち、そのことが集団の学習の質を高めていくことにつながる事が分かった。

本研究では、京都市立の3小学校と本学との小大連携による具体的な実践研究を行い一定の成果が得られた。教職に関わる研究は、小学校など教育現場と大学との連携による開かれた研究、具体的かつ実践的な授業実践研究を行うことによってより深められ意義あるものになると考えられる。

今後とも、このような教育現場との連携した意義ある研究が継続されることを期待したい。

Cultivating Spirituality出版について

Cultivating Spirituality: A Modern Shin Buddhist Anthology

出版・記念祝賀会報告

国際仏教研究 研究代表者・教授 ロバート F. ローズ



A MODERN SHIN BUDDHIST ANTHOLOGY *Cultivating Spirituality*

真宗総合研究所・国際仏教研究班では、長年にわたり研究活動の一環として、近代真宗教学者の論集の英訳出版に取り組んできたが、2011年の12月に、その成果がマーク L. ブラム (Mark L. Blum)・ロバート F. ローズ (Robert F. Rhodes) の編集のもと *Cultivating Spirituality: A Modern Shin Buddhist Anthology* としてニューヨーク州立大学出版社 (State University of New York) から出版された。また、この論文集の出版を記念して、その翻訳作業に携わった研究者と関係者を中心に、2012年3月13日の19時から21時のあいだ、京都ガーデンパレスで祝賀会が開催された。

今回出版されたアンソロジーに紹介されているのは清沢満之・曾我量深・金子大栄・安田理深の近代真宗学を代表する教学者の主要論文10編である。清沢満之の論文はニューヨーク州立大学マーク L. ブラム氏、曾我量深の論文は南山大学名誉教授の故ヤン・ワン・ブラフト氏、金子大栄の論文はロバート F. ローズ、安田理深の論文は早稲田大学教授ポール・ワット氏が、それぞれ英訳した。収録されている論文は次の通りである。

清沢満之

- 「仏教者盡自重乎」
- 「宗教的徳徳 (俗諦) と普通徳徳との交渉」
- 「我が信念」

曾我量深

- 「地上の教主—法蔵菩薩出現の意義」
- 「親鸞の仏教史観」
- 『歎異抄聴記』(抄訳)

金子大栄

- 『仏教学序説』

安田理深

- 「仏教の方法的把握」
- 「無の鏡」
- 「名は単に名にあらず」

いずれも、近代真宗思想史を語る上で、欠かすことのできない文書である。従来、清沢満之については、ある程度は欧米に紹介されていたが、他の近代真宗教学者の思想は断片的にしか知られていなかった。そのため、今回の論文集の出版によって、これらの教学者の仏教 (真宗) 理解が欧米の学会に知られるようになったことの意義は、極めて大きいと思われる。これを期に、アメリカやヨーロッパ、さらにはアジア諸国の若い研究者が、近代の真宗思想に関心を持ってもらえればと思うところである。



出版記念祝賀会 於：京都ガーデンパレス

研究成果報告会

2011年度「特定研究・指定研究」研究成果報告会

真宗総合研究所主事・准教授 采翠 晃

2012年3月2日(金)13:00~14:40に、響流館3階メディアホールにおいて、2011年度「特定研究・指定研究」研究成果報告会を公開で行った。草野顕之学長はじめ、藤嶽明信研究所長、研究所委員会委員、各研究班研究員など、多数の出席者を得て、盛況であった。

今年度は、以下に報告する4班の共同研究の成果が発表された。

特定研究

「建学の精神」教育推進研究

大学史資料室と連携して、歴代学長の「建学の精神」に関する訓辞資料の収集状況の確認、『大谷大学百年史』「建学の精神」に関する記事の編纂方針の確認を行った。

現在『学生手帳』には清沢・佐々木両学長の訓辞が「建学の精神」として掲載されているが、これがいつからどのような経緯で定められたのかを確認すべきとの問題意識が共有された。

その上で、全体での研究会を9回(内4回を公開)、調査のための出張を1回行った。

その結果、次のような事柄の研究を深化させることの重要性が明らかになった。

- 1 近代化過程における「宗教学校」・「宗教教育」の位置に関する研究
- 2 本学における「建学の精神」の位置に関する研究
- 3 現代における仏教系大学の現状と課題に関する研究

指定研究

国際仏教研究

長年にわたって取り組んできた真宗近代教学論文集の英訳出版が今年度ようやく実現し、11月にSUNY出版から発刊された。今後、出版を記念した真宗近代教学に関するシンポジウムを2013年度に開催すべく計画を進めている。翻訳事業については、佐々木月樵「大谷大学樹立の精神」の英訳研究を進めるとともに、ディートリッヒ・コルシュ『マルティン・ルター』については翻訳作業を終え出版準備に取り組んでいる。また、2010年にフランス高等研究院において行われたシンポジウム「フランスと日本におけるナショナル・アイデンティティと宗教」をフランスで刊行すべく、準備を進めている。

国際的な学会に参加して本学の存在感を高めることも本研究班の重要な任務である。本年度は、8月5日(金)・6日(土)の二日間にわたって大谷大学を会場に第15回国際真宗学会学術大会を真宗関係5大学共同開催の形で開催した。10カ国以上から総数130名あまりの参加者があり、充実した大会となった。また、国際ルードルフ・オットー・シンポジオン(5月12日~14日)、ヨーロッパ日本研究協会(EAJS)国際会議(8月24日~27日)、アメリカ宗教学会(AAR)年次大会(11月19日~22日)、といった諸学会への参加・発表を行い、併せて研究者と交流を図って、諸外国の仏教研究事情の情報収集を行った。また、中国社会科学院歴史研究所を訪問し、交流を深めると共に、今後に関する協議も行った。

また、海外の研究者を招いての公開講演会・公開研究会を3度にわたって行った。

西藏文献研究

本学所蔵の稀観書ツァンナクパ著『量決訳註』電子テキスト化を進め、科文とダルマキールティの『量決訳』の対応箇所を入力した校訂テキストを作成し、公開した。ネット上での公開に加え、さらに冊子体での出版を検討している。また本学所蔵の木版本を底本として既に入力済みのミラレパの『グルブム(十万歌)』の電子テキストに、テンゲューリン版および青海民族出版社本の異同を調査して校訂したテキストを作成して公開した。

更に、大谷大学図書館所蔵データの提供を受け、それを基に研究者向けのデータベースを作成する。さらにTBRC(Tibetan Buddhist Resource Center)のチベット語文献PDFコア・コレクションの学内での利用促進のためにデータベースを作成している。

また、本学が所蔵している貴重なパーリ語貝葉写本のデジタル画像データ化の作業を進めている。それと同時に、現地調査も実施しながら、タイ王室から寄贈されたものを中心とする東南アジアのパーリ語貝葉写本における稀観文献の抽出作業を行っている。

更に、中国蔵学研究中心や中国故宫博物院の研究者との交流を行った。

真宗同朋会運動研究

本研究は、真宗と社会との関わりを主題とし、具体的

には真宗同朋会運動における求道と獲信に学ぶものである。したがって、本研究は、一人ひとりにおける「群萌の目覚め」に視点を置き、特に、求道の道程に焦点をあてて、一人ひとりの宗教的人格に触れることを通して、真宗同朋会運動の意義を明らかにすることを目的とする。

また、信仰が生み出す社会性、および人々の精神性に与えた影響なども調査を通して把握し、真宗同朋会運動の現状や社会的・現代的意義を明らかにしていきたい。

以上のことから、本研究は昨年度に引き続き、全体を理論編と調査編の二部構成として組み立てた。現在出版に向けて準備を進めている。

必ずしも幅広いとは言い難いものの、大学院生や研究補助員の参加も見られ、徐々にではあるが、充実した報告会となりつつある。次回は、今年度よりも更に充実したものとなることが期待される。

特別研究員研究成果報告

後伝期チベットにおける自己認識解釈の思想史的研究

(2009–2011年度) 特別研究員 村上 徳樹

はじめに 筆者は平成21年度から3年間、日本学術振興会特別研究員として大谷大学で研究に従事した。以下はその研究成果の報告である。筆者は博士論文でゲルク派(dge lugs pa)の開祖ツォンカバ・ロサンタクパ(Tsong kha pa bLo zang grags pa, 1357–1419, 以下ツォンカバ)の高弟の一人ケードゥブジェ・ゲレクベルサンポ(mKhas grub rje dGe legs dpal bzang po, 1385–1438, 以下ケードゥブジェ)による自己認識の解釈を研究した。本研究はその研究をもとに、より広い視点から後伝期チベットにおける自己認識解釈を思想史的に検討し、ゲルク派の自己認識解釈の独自性やその意義がどこにあったのかを明らかにすることを目的としている。

研究内容 上記の研究を遂行するにあたり、近年公刊された『カダム派全集』に収録される論理学書を中心として、自己認識を論じる箇所を抜き出して資料集を作成し、その解釈を分析した。特に重要視されるチャバ・チューキセング(Phywa/ Cha pa chos kyi seng nge, 1109–1169, 以下チャバ)が著した論理学書に関しては、『量決訳注』のうち知覚章のテキストを全て入力した。その他、ゴクローツァーフ・ロデンシェーラブ(rNgog lo tsa ba bLo ldan shes rab, 1059–1109)、ツァンナクパ・ツォンドゥーセンゲ(rTsang nag pa brTson gros seng nge, 12c)などの代表的な諸論師の自己認識関連箇所の資料集を作成した。またケードゥブジェの主要な批判対象であると目されるサキヤ派のヤクトウン・サンギェーベル(g.Yag ston Sangs rgyas dpal, 1350–1414, 以下ヤクトウン)、ロントウン・シャーキヤギェルツェン(Rong ston Shākya rgyal mtshan, 1367–1449, 以下ロントウン)などの自己認識関連箇所の資料集も作成した。

さらにまた、ケードゥブジェが著した『七部論理学書 莊嚴、心闇の払拭』(以下『心闇の払拭』)を一通り翻訳した。特に自己認識知覚の問題と関連する「客体」(yul)から「認識結果」(tshad ma'i 'bras bu)までを範囲として正確な翻訳をするよう努めた。この翻訳作業はケードゥブジェの認識論の全体像を把握するための作業である。自己認識を扱う場合、その問題点は認識論をはじめとして存在論にも及び、彼の自己認識理解を思想体系全体の中で位置づけるためには、彼の論理学総論とも呼べ

る『心闇の払拭』のなかでも「客体」から「認識結果」までの箇所を理解することが望ましいと考えられる。その他、補助作業としてケードゥブジェが著した『量評釈注』第二章のテキスト入力も行った。ケードゥブジェの『量評釈注』のその他の箇所はAsian Classics Input Projectでテキスト入力されているが、第二章は未だ入力されていなかったため、研究の能率を向上させるためにこの作業を行った。『心闇の払拭』はダルマキールティの主著『量評釈』からの引用が多数見られ、それに対するケードゥブジェの註釈を参照することが研究作業として望ましいと考えられるためである。

研究成果 以上の作業をまとめた一つの成果として『真宗総合研究所紀要』29号に「ケードゥブジェ著『七部論理学書 莊嚴、心闇の払拭』「自己認識知覚」訳注研究」を公表した。同研究は『心闇の払拭』のなかの「自己認識知覚」箇所の訳注研究である。同箇所でもケードゥブジェは自身の自己認識解釈を示すとともに、他者の自己認識解釈を批判している。従って、その批判されている解釈を分析することにより、当時、自己認識が如何に解釈されていたか理解でき、また、双方の解釈の相違点を分析することによりケードゥブジェの自己認識解釈の独自性が明かにできるのではないかと考えられる。同箇所では「全ての知は知それ自体に対して自己認識知覚である」という主張および「自己認識知覚に客体は存在しない」という主張が批判されている。前者は誰が主張していたのかを特定するまでには至らなかった。後者の説はサキヤ派のヤクトウンの説であると考えられる。本訳注研究ではこの二つの説とケードゥブジェの自己認識解釈を分析し、双方の見解の相違点を考察した。その考察結果は序および訳注に記している。

今後の課題 この『心闇の払拭』自己認識知覚箇所の訳注研究により、ケードゥブジェの自己認識解釈と敵者の解釈の相違点をある程度明確化できたのではないかとと思われる。しかしながら、ケードゥブジェが批判している他説のうち「全ての知は知それ自体に対して自己認識知覚である」という説については、誰がその批判の対象であるかを確定するに至らなかった。これは近年かなりの量の資料が参照可能になっているにもかかわらず、未だ

発見されていない資料が存在していることを意味していると考えられる。実際、『心闇の払拭』の翻訳を作成するにあたり、そこで批判される様々な敵者の説を特定するように試みたが、多くの場合、同定することができなかった。この点に関しては、今後のテキストの出版に期待するより他にない。また、カダム派の学僧達の見解についても、従来の研究ではゲルク派の思想はカダム派から強い影響を受けていると言われているが、実際にどの

程度の影響を受けているのか明かではない。本研究においても自己認識解釈に関してチャバヤツァンナクバ等の解釈を分析したが、現時点ではケードゥブジェの解釈とは異なっているのではないかと考えている。この点はさらに彼等の著書を精査して、自己認識を含めた論理学全体の理解に関して、如何なる側面に対してどの程度の影響を与えているかを細部にわたり分析する必要があると考えられる。

フレデリック・ダグラス晩年のマスキュリニティ言説と アメリカ社会における人種表象

(2010-2011年度) 特別研究員 朴 珣 英

本研究は、19世紀アメリカで奴隷の身分から黒人解放運動の思想家・作家・活動家となったフレデリック・ダグラス (Frederick Douglass : 1818-95) に関する筆者の文学および文化史的研究を発展させたものである。研究目的は、ダグラスの奴隷体験記や小説、回想録、その他の資料にみられる人種およびマスキュリニティに関わる言説に焦点を当て、その特質および19世紀末から20世紀に至る世紀転換期のアメリカ社会の人種表象を明らかにすることである。

本研究は文部科学省科学研究費補助金交付の研究（若手研究B：2010-2011年度）でもあり、2年度にわたる研究成果は以下のとおりである。

2010年度

1. “Transcription of Frederick Douglass’s Unpublished Handwritten Manuscripts about Toussaint L’Ouverture with an Introduction” (フレデリック・ダグラスのトゥサン・ルヴェルチュールに関する未公開原稿—翻刻と解題)、大谷大学西洋文学研究会『西洋文学研究』30号、2010年6月、1-26頁。

本稿は、ダグラスの残したサント・ドミンゴ（現ハイチ）の独立指導者トゥサン・ルヴェルチュールに関する未公開の手書き草稿全文 (Frederick Douglass Papers. 34 microfilms. Washington, DC:

Manuscript Division, Library of Congress.)に収載)の翻刻および英文による解題である。対象とした草稿はダグラス研究では重要なものであるが、今まで一部しか翻刻されてこなかった。解題ではダグラス晩年の著述の詳細な整理および検討を試みた。ダグラスの政治家としての最初期から晩年までのマスキュリニティ言説の変容を、アメリカ社会の変化とともに論じた。また19世紀から20世紀への世紀転換期における当時のアメリカ社会の黒人に対する人種表象を考察した。さらに、ダグラスの原稿中のレトリックを中心とした分析を行い、そこに見られるダグラスのマスキュリニティ言説および「理想の黒人」像を明らかにした。

2. 「フレデリック・ダグラスのトゥサン・ルヴェルチュールに関する未公開原稿について」、大谷大学西洋文学研究会年次大会・口頭発表（大谷大学）、2010年7月。

本口頭発表は、上記1の論文を踏まえて、ダグラスの未公開原稿および晩年の演説、回想録の記述などを手掛かりに、世紀転換期のアメリカ社会に根強く残る白人至上主義とそれに対抗すべくダグラスが採ったマスキュリニティ戦略を考察したものである。

3. “Silence and Eloquence in Frederick Douglass’s ‘The Heroic Slave’ and Herman Melville’s ‘Benito Cereno’: A Preliminary Study” (フレデリック・ダグラス『英雄的奴隷』およびハーマン・メルヴィル『ベニト・セラノ』における沈黙と雄弁——その予備的研究)、大谷大学英文学会『英文学会会報』37号、2011年3月、1-22頁。

本論文はフレデリック・ダグラス(1818-95)と、彼と同時代に活躍した白人作家ハーマン・メルヴィル(1819-91)との比較研究である。ダグラスとメルヴィルはともに奴隷制に深く関心を持っていた作家と言われる。しかし、両者が実際に接触や交流があった可能性も含め、最近ようやく注目され始めたテーマでもある。したがって、本稿は2年間の本研究の成果であるが、筆者が今後発展させるべき課題の一つとするために、予備的研究と位置付けている。論文では、黒人奴隷の船上蜂起を題材にした中編小説二作品、すなわちダグラスの“The Heroic Slave”(1853)とメルヴィルの“Benito Cereno”(1855)における黒人表象に焦点を当てた。前者は黒人奴隷の声なき声を代弁する黒人像を提示し、「雄弁」をもって黒人奴隷の苦悩と自由への渴望を表象し、後者は白人主人に対する表面的な追従と服従を描くことで白人の欺瞞を照らし出し、黒人奴隷の「沈黙」をもって黒人の人間性を表象したことを明らかにした。

4. ジョナサン・アール著(古川哲史・朴珣英共訳)『地図でみるアフリカ系アメリカ人の歴史——大西洋奴隷貿易から20世紀まで』、明石書店、2011年3月、総144頁。

本書はアフリカ系アメリカ人の歴史や文化に関わる事項を、地図や写真とともに簡潔に提示した歴史地図書Jonathan Earle, *The Routledge Atlas of African American History*, New York and London: Routledge, 2000. の翻訳(全頁共訳)である。一般向け参考図書的な役割の本として訳出、刊行した。

2011年度

5. 里内克巳編著『バラク・オバマの言葉と文学——自伝が語る人種とアメリカ』、彩流社、2011年9月、総xii+281頁。(第2章: 朴珣英「人種の壁を越える試み——フレデリック・ダグラスからバラク・オバマへ」、87-130頁。)

本書は、現アメリカ合衆国大統領であるバラク・オバマが青年期に著した自伝的回想録『ドリームズ・フロム・マイ・ファーザー』についての論集である。日本アメリカ文学会関西支部大会フォーラム<バラク・オバマの自伝を読む——文学研究からのアプローチ>(講師: 里内克巳、朴珣英、松原陽子、戸田由紀子、ウェルズ恵子)に基づくもの。担当論文では、若き日のオバマが自己形成の上で大きな影響を受けたアメリカ黒人の知的伝統に焦点を当てた。その伝統は、20世紀の公民権運動時代のキング牧師やマルコムXあるいは近代黒人解放運動の父と呼ばれるW・E・B・デュボイス以前の、19世紀奴隷制廃止運動時代のフレデリック・ダグラスにまで遡ることができることを明らかにした。

6. チャールズ・ヴィラ＝ヴィセンシオ著(北島義信監訳)『苦悩を希望へ——自由の精神: 南アフリカの指導者、宗教と政治を語る』、本の泉社、2012年4月末刊行予定、総431頁。

本書はCharles Villa-Vicencio, *The Spirit of Freedom: South African Leaders on Religion and Politics*, Berkeley: University of California Press, 1996. の翻訳書である。「チェリル・カロラス——政治ではなく闘争」(96-113頁)および「ファティマ・ミーア——イスラーム教徒であり、女性であること」(264-277頁)の2章を翻訳担当した。

出家者の家族：現代真宗寺院における寺族女性、伝統と変更

(2009–2011年度) 特別研究員 スターリング・ジェシカ

研究の出発点

私が初めて日本にきたのは、12年前だった。しかし、日本仏教と初めて出会った際、驚いたことがあった。私の住んでいた近所のお寺にお参りをした時、そのお寺にはいわゆる「修行堂の僧」ではなく、男性僧侶一人と彼の家族も「庫裏」という本堂から少し離れた住居に、静かに暮らしていたのである。アメリカの大学で仏教を勉強した時、この様な現実に関しては一度も触れたことはなかったのである。私は、それは何故だろうかという疑問を持った。

その後帰国し、バージニア大学大学院宗教学科に入り、現代仏教や、日本仏教と女性の諸問題を研究し始めた。曹洞宗の「寺族問題」などを知ってから、僧侶妻帯の長い歴史のある浄土真宗について研究と調査をすすめることに決めた。2009年度からは大谷大学真宗総合研究所で、「出家者の家族：現代真宗寺院における寺族女性、伝統と変更」という題目で、博士論文の研究を始めた。

研究の重要性

仏教学では一般的に「在家」と「出家」との二元的な視点を通して、女性宗教者についての研究がなされている。しかし、浄土真宗の女性の所属性には、重要な違いがあることに着目した。中世真宗では、「尼」と名乗った女性も存在したが、真宗の場合は「独身の出家者」という意義は一切入っていなかった。そうではなく、血脈や家族関係こそが宗教生活の場となっていたのである。これは初期真宗の道場が、「坊主」と「坊守」という男女二人の宗教者により運営されていたという現象としてあらわれている。また、仏光寺や本願寺の法主という寺院のレベルにおいても、血脈による継承がなされているが、こうした仏教教団における女性宗教者のあり方は、大変関心のある研究であり重要な課題の一つである。この様な幅広いテーマの中、博士論文は特に「お寺の女性たち」（つまり「坊守」）に焦点を当て研究をすすめた。「非僧非俗」という、親鸞の言葉はよく知られているのだが、この研究では「非尼非俗」という宗教的所属性を掘り下げて、「女性と仏教」という研究課題を究明し、成果をあげたいと考えた。

そして、博士論文の一部には、現代の真宗教団と女性

に関しての調査を含めて、「現代と仏教」というテーマにも触れた。特にこの20年間は、「人権」や「男女平等」という現代的課題と、伝統的な性別による役割分担との矛盾が、真宗教団において大きな話題になった。現在、真宗以外の宗派においても寺院の世襲問題などは類似する問題として取り組まれているため、こういった面に関しても、この研究は重要であると考ええる。

真宗における「婦人教化論」と「坊守論」の概要

大谷大学と龍谷大学の文献資料を通して、初期真宗から続いている「女人往生論」、そして蓮如上人で始まった「坊守論」を調べた。この調査は存覚の『女人往生聞書』、蓮如の『御文』、近世の法語や談義本、それから明治以降の婦人教化論と坊守論も含めて研究をすすめた。最初に真宗坊主の内方（つまり坊守）を対象として教化をおこなったのは蓮如であった。「多屋衆内方教化」や「おさらへ」という御文には、蓮如の女人往生論が説かれているが、特に坊守に関しては「坊主の内方となったのは、まことに前世の宿縁があったからだ」と記されている。

近世に入り、江戸時代後期の坊守向けの説教にも、蓮如の坊守論が説かれた。そして近世特性の仏法王法論によって、坊守は封建時代の理想的な「女」として描かれた。明治以降の坊守論は中世・近世の言説と、明治時代の精神的風土として「良妻賢母」に焦点をおいて論考をおこなった。（明治・大正・昭和の坊守像についての論文は、2013年度の *Japanese Journal of Religious Studies* に掲載されている。）一般的には、坊守の理想像はそれぞれの時代のジェンダーノーム（ジェンダー規範）に合わせて変化してきたと言えよう。

しかし、この調査で注目すべきことがある。それは戦後までは浄土真宗における「女性像」は、全て男性の手で書かれたものだという点である。文献資料には、恵信尼や覚信尼の手紙を除き、女性自身の声は一切あらわれてこない。この様な問題を考慮し、文献資料の調査は本論文の単なる出発点と位置づけ、本博士論文の研究では、なるべく坊守自身の話しの聞き取りをおこなうことにした。

人間調査の研究

日本で行った人間研究は、大谷大学と龍谷大学の教授と学生や東本願寺の宗務役員からの紹介を通して坊守数名と話しをし、その横の繋がりを広げることで東西両派の寺族女性約60人の話しの聞き取りを行うことができた。インタビューをはじめ、研修会の見学、寺院活動の参加観察など、様々な研究方法を通して情報を収集した。こうした人間調査で、お寺における坊守の実際の役割や、女性宗教者の教義解釈などがわかった。

戦時下の寺族女性の活動と「坊守」の意義

最後に、戦時中の寺族女性の活動を調べてきた。戦時中は男性僧侶不足問題に応じて真宗教団が初めて女性の得度と教師資格を許可した。(本願寺派は1931年、真宗大谷派は1941年に女性教師を認めた。)でも実際には、既に住職不在の寺院に住んだ女性たちは、宗門の許可を得ずにお参りなどをしてお寺の世話をしていた。当時の坊守・女性教師や、彼女らの娘と孫娘をインタビューすることでその時代の寺族女性達の実態がわかった。この研究は博士論文の一部にもなっているが、2010年に早

稲田大学でのアジア学研究会と、2012年にデューク大学で発表した。

しかし住職不在のお寺の坊守が「お寺さん」だから「僧侶」として門徒に認められ、法務を勤めるという現象は、戦時中のことだけではない。真宗の歴史をよく見ると、数人の女性住持が見えてくる。一番知られているのは仏光寺の了明尼(1294-1376、了源の後家)だが、勝如尼(1428-1495、如乗の後家)と如順(如光の後家)という例もある。

「坊守」という言葉が「お寺を守る」という意味を表すとよく言われる。しかし、これは日常的に留守番をするだけではなく、坊主(現在は住職)が亡くなった場合も、坊守が「住持」としてお寺を守るという意味も含まれる。こうした「非尼非俗」の存在を考えつつ、「真宗における女性の所属性」という当初の研究課題を振り返ると、浄土真宗の女性宗教者とは、「出家者」という形を取る仏教専門者ではなく、妻、母という役割も兼ねた仏教専門者というあり方であることがあきらかになった。

真宗総合研究所彙報 2011. 10. 1～2012. 4. 30

■研究所関係

◎真宗総合研究所委員会

◇12月7日(水) 12時15分～(博綜館5階 第4会議室)

1. 2012(平成24)年度「一般研究」の選考について
2. 『研究所研究紀要』編集について
3. その他

◇2月15日(水) 14時～(博綜館5階 第4会議室)

1. 規程の改正について
1 真宗総合研究所規程の一部改正
2 真宗総合研究所第8条に係る客員研究員等に関する細則の一部改正
2. その他

◇3月12日(月) 14時～(博綜館5階 第4会議室)

1. 2011(平成23)年度「指定研究」の研究成果について
2. 2012(平成24)年度「指定研究」の研究計画について
3. その他

○「特定研究・指定研究」研究成果報告会

◇3月2日(金) 13時～(響流館3階 マルチメディア演習室)

1. 2011(平成23)年度「特定研究」・「指定研究」の研究成果について
2. その他

「建学の精神」教育推進研究

《全体研究会》

◇2011年9月22日(木) 16:20～17:50

場所: 響流館4階 真宗総合研究所内 ミーティングルーム

議題: 研究班の活動内容の最終確認

◇2011年11月2日(水) 16:30～19:00

①公開研究会

場所: 響流館3階 マルチメディア演習室

講師: 磯前順一氏(国際日本文化研究センター 准教授)

テーマ: 「明治期における「宗教」という言葉の位相」

②討論会

場所: 響流館4階 真宗総合研究所内 ミーティングルーム

内容: ①を踏まえて、磯前氏と研究員との討論会

◇2011年12月1日(木) 16:20～17:50

場所: 響流館4階 真宗総合研究所内 ミーティングルーム

形式: 公開研究会

テーマ: 教育推進研究について

講師: 関口敏美氏(大谷大学教授)

◇2012年2月14日(火) 14:00～15:30

場所: 響流館4階 真宗総合研究所内 ミーティングルーム

議題: 後期研究会総括並びに出張報告

◇2012年3月23日(金) 10:30～12:00

場所: 響流館4階 真宗総合研究所内 ミーティングルーム

テーマ: 「仏教と教育の関係性に関する哲学的・臨床的研究—「心の教育」の所在を探る—」に関する事について

講師: 山内清郎氏(大谷大学准教授)

《出張》

◇2011年11月16～17日(水～木)

調査員: 研究員 木越康・西本祐攝

調査先: 西願寺(広島県)

目的: 学生手帳に記載された「建学の精神」の変遷について、寺川俊昭名誉教授に聞き取り調査を行い、その経緯を明らかにすること。

国際仏教研究

〈英米班〉

《国際学会参加》

○アメリカ宗教学会(American Academy of Religion)年次大会 於サンフランシスコ

期間: 2011年11月19日(土)から22日(火)

参加者: 井上尚実(研究員)、マイケル・コンウェイ(嘱託研究員)、マーク・ブラム(嘱託研究員)

《会議・研究会》

◇佐々木月樵「大谷大学樹立の精神」翻訳研究

第12回研究会 2011年11月29日(火) 18:00～19:30

第13回研究会 2011年12月20日(火) 18:00～19:30

第14回研究会 2012年2月3日(金) 14:30～16:30

(於：真宗総合研究所内ミーティングルーム)

◇ミーティング

2012年度第1回打ち合わせ 4月17日(火) 12:10~12:50

(於：真宗総合研究所内ミーティングルーム)

《公開講演会》

◇2011年11月15日(火) 16:20~18:00

会場：マルチメディア演習室(響流館3階)

講師：ジェシカ・L・メイン氏(カナダ、ブリティッシュ・コロンビア大学)

講題：“Shin Buddhism for the Good of Society:

To Act within or beyond the Religious Organization (kyōdan).”

「社会のための浄土真宗一教団を通して実践するか否か—」

〈ドイツ・フランス班〉

◇フランス国立高等研究院(EPHE)において2010年に開催されたシンポジウム“National Identities and Religion: A French-Japanese Comparative Approach”での口頭発表をもとに、発表者(ロバート・F・ローズ、井上尚実、村山保史、飯田剛史、藤枝真、番場寛)が発表原稿を英語やフランス語で論文化している。現在、それらの論文をEPHEのフィリップ・ポルティエ教授に送り、フランス語で出版する準備を進めている。

西藏文献研究

《研究打ち合わせ》

各研究業務の進捗状況を確認するために、毎月1回のペースで打ち合わせをおこなった。

◇10月5日(水)午後4時20分~ 於：真宗総合研究所内ミーティングルーム

◇11月2日(水)午後4時20分~ 於：真宗総合研究所内ミーティングルーム

◇12月7日(水)午後4時20分~ 於：真宗総合研究所内ミーティングルーム

◇1月11日(水)午後4時20分~ 於：真宗総合研究所内ミーティングルーム

◇2月1日(水)午後3時30分~ 於：真宗総合研究所内ミーティングルーム

◇3月2日(水)午前10時32分~ 於：真宗総合研究所内ミーティングルーム

◇4月11日(水)午後4時20分~ 於：真宗総合研究所内ミーティングルーム

《北京版チベット大蔵経の撮影》

◇2012年2月23日~3月15日まで、図書館にて北京版チベット大蔵経の撮影をおこなった。今回はテンギユルの般若部のうち3函(Tome196 [ka]、Tome197 [kha]、Tome198 [ga])を撮影した。

《海外の研究者、研究機関との交流》

◇2011年10月6日(木)中国藏学研究中心のダムドゥル副総幹事長をはじめ7名の研究員が来学。情報交換をおこなった。

◇2011年11月17日(木)北京故宫博物院より王躍工藏伝仏教文物研究中心秘書長および北京大学梵文貝葉経与仏教文献研究室より薩爾吉博士をはじめとする一行が来学。本学所蔵のチベット語文献を閲覧した後、情報交換をおこなった。

真宗同朋会運動研究

《事務連絡および定期研究会》

◇2011年度：毎週月曜日 13:00~16:10(3・4限)研究会、調査のテープ起こしとその成文化、そして、内容の位置づけを行うため、読み合わせを実施した。

《公開研究会について》

同朋会運動の社会的意義を明確化していくために、宗門内・外両面からの意見・研究報告を公開研究会(計13回)という形で、研究展開した。

また宗門の研究機関である教学研究所や全国推進委員協議会との連携、また学外研究機関(東京大学など)とも交流し、具体的に研究活動を展開した。その具体的成果の一つが「お念仏手渡し奉仕団」の企画と展開である。この活動は、御門徒の方々の大谷大学への信頼を回復し、深めたという実績を挙げた。同時に学生達の学びにも具体性を開くことに寄与した。

《聞き書き調査の実施》

聞き書き調査の実施は、本研究の中心課題であり、主に門信徒の方々に行っている。

本調査は、「聞き書き」という手法の特性から、1件あたりの調査時間に膨大な時間を要する。この研究期間をとおして、全国各地で約30件の調査を行った。

《出版計画》

本研究成果は、出版する計画である。

大谷大学史資料室

<研究会参加>

全国大学史資料協議会2011年度総会ならびに全国研究会
(第76回全国大学史資料協議会東日本部会研究会)

日 程：2011年10月5日(水)～7日(金)

場 所：皇學館大学

参加者：采翠晃・稲葉維摩・大畑博嗣

<ミーティング>

2011年10月27日 13：30～15：00

出席者：采翠晃・戸次顕彰・稲葉維摩・大畑博嗣

場 所：真宗総合研究所

内 容：大谷大学史資料室スポット展示の企画・準備

2011年11月3日 17：00～19：00

出席者：采翠晃・戸次顕彰・稲葉維摩・大畑博嗣

場 所：真宗総合研究所

内 容：展示タイトルの決定と出品資料の検討

2012年2月29日 17：00～19：00

出席者：采翠晃・戸次顕彰・稲葉維摩・大畑博嗣

場 所：真宗総合研究所

内 容：大谷大学史資料室スポット展示の企画・準備

<大谷大学史資料室スポット展示の作業>

2011年11月17日 10：00～16：00

タイトル：「大谷大学を支えた人物～第十一代学長 関
根仁応～」

参加者：戸次顕彰・稲葉維摩・大畑博嗣

場 所：大谷大学図書館入口展示スペース

展示期間：2011年11月17日～2012年3月13日

2012年3月14日 10：00～14：00

タイトル：「東京から京都へ～大谷大学の歴史をたどる
～」

参加者：戸次顕彰・稲葉維摩

場 所：大谷大学図書館入口展示スペース

展示期間：2012年3月14日～2012年6月頃まで(予定)

上記活動以外にも、大谷大学史資料室では大学史資料
の調査・整理や、閲覧・質問等への対応を日常業務と
して行った。

また展示作業に際しては大谷大学博物館からの協力を
得た。ここに謝意を記す。

親鸞関係文献目録資料室

【会議：収集データの整理作業】

○2011年10月4日(火) 14：40～16：10 (真宗総合研究所
フリースペースデスク)

○2011年10月12日(水) 16：20～17：50 (同上)

○2011年10月18日(火) 14：40～16：10 (同上)

○2011年11月1日(火) 14：40～16：10 (同上)

○2011年11月8日(火) 14：40～16：10 (同上)

○2011年11月15日(火) 15：00～16：10 (同上)

○2011年11月29日(火) 14：40～16：10 (同上)

○2011年12月6日(火) 13：00～14：30 (同上)

○2011年12月20日(火) 14：40～16：10 (同上)

○2011年12月27日(火) 13：00～14：30 (同上)

○2012年1月17日(火) 14：40～16：10 (同上)

○2012年2月14日(火) 15：00～16：10 (同上)

○2012年2月17日(金) 13：00～14：30 (同上)

○2012年2月20日(月) 16：20～17：50 (同上)

○2012年2月22日(水) 9：30～11：00 (同上)

○2012年2月27日(月) 14：00～15：30 (同上)

○2012年2月29日(水) 16：00～17：50 (同上)

○2012年3月2日(金) 16：00～17：50 (同上)

○2012年3月7日(水) 16：00～17：50 (同上)

○2012年3月12日(月) 15：00～16：30 (同上)

○2012年3月14日(水) 14：40～16：10 (同上)

【成果公開】

○2012年3月28日(水)

「親鸞関係文献目録データ」を大学のwebサイトを通じて
公開した。

デジタル・アーカイブ資料室

2011年12月5日

「大谷大学図書館古典籍データベース」を、図書館の
webサイトを通じて公開した。

■人事(2012年4月1日付)

研究所長 (新) 浅見直一郎 (旧) 藤嶽明信

□特別研究員

*林 佩 瑩 (Lin Pei-Ying)

研究期間 2012年4月1日～2013年3月31日 (延長)

研究課題 10世紀から14世紀における禪と浄土教—中
国と日本の文化の交渉を観点に—

指導教員 ロバート F. ローズ 教授

*小西賢吾

現 職 神戸女学院大学非常勤講師

研究期間 2012年4月1日～2014年3月31日 (新規)

研究課題 チベットの伝統宗教の越境と存続に關す
る文化人類学的研究

指導教員 三宅伸一郎 准教授

研 究 所 報 第 60 号

2012年5月1日 発行

編集発行 大谷大学真宗総合研究所

〒603-8143 京都市北区小山上総町

Tel. 075-411-8498 Fax. 075-411-8435